日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 123

〈プラハのドイツ語文学〉再考

三谷 研爾 編

日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 123

Neue Perspektiven der *Prager deutschsprachigen Literatur*

Herausgegeben
von
Kenji MITANI

JGG Tokyo

目 次

序 論
〈プラハのドイツ語文学〉研究　その過去と現在
三谷 研爾……001

第1章
マウトナーからカフカへ ―― 多言語状況の痕跡
川島　隆……009

第2章
世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア
中村　寿……021

第3章
カフカに見る「チェコ文学」との交点 ―― ニェムツォヴァーとランゲルを介して
阿部 賢一……035

第4章
ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉の継受
島田 淳子……045

あとがきにかえて
三谷 研爾……059

序 論

〈プラハのドイツ語文学〉研究　その過去と現在

三谷 研爾

〈プラハのドイツ語文学 Prager deutschsprachige Literatur〉とは、1890年代半ばからナチス・ドイツがチェコスロヴァキアに侵攻した1939年、もしくは第二次世界大戦終結の1945年までの約半世紀のあいだ、プラハでの生活経験を背景にしたドイツ語作家たちの活動をひとつの文学史的現象としてとらえるタームである。そこに含まれるのはリルケ、カフカ、ヴェルフェルをはじめ、マイリンク Gustav Meyrink、レッピン Paul Leppin、ブロート Max Brod、バウム Oskar Baum、キッシュ Egon Erwin Kisch、ウルツィディール Johannes Urzidil、ヴァイス Ernst Weiss、ウンガー Hermann Ungar など50余名で、その多くはユダヤ系であった。この現象の背後には、世紀転換期にはじまり、第一次世界大戦とハプスブルク帝国の解体、チェコスロヴァキア第一共和国の独立、さらには第二次世界大戦の破局へとつらなる時代の激動がある。その間の作家たちの移動の軌跡は、プラハを起点としながら、ドイツ語圏のみならずパリやロンドンやテルアビブ、さらには遠くアメリカやインドにまで及んだ。

この〈プラハのドイツ語文学〉についての研究も、本格的な取り組みがはじまってから同じく約半世紀が経過した。当初はカフカやリルケの研究者によって先導されていた議論は、とりわけ1990年代以降格段に深まり、いまやドイツ語文献のみならずチェコ語文献に当たって検討をすすめる段階に入っている。新たな一次資料を発掘・分析する作業は、今後ますます丹念で精緻なものになっていくだろう。そうであるだけに、研究の現状をよく把握し、議論をどのような方向へ展開するべきかについてクリアな問題意識をもっていなければ、増加するいっぽうの研究情報の大波に翻弄される可能性が高い。ひとりの研究者がドイツ語とチェコ語の資料をともに活用することの難しい日本での状況を考えるとき、問題意識の共有と研究のネットワーク化がきわめて重要だと思われる。

本稿では、以下につづく諸論考に先んじて、〈プラハのドイツ語文学〉をめぐってこれまでなにが語られ、明らかにされてきたかを簡単に振り返っておきたい。そのうえで、近年の研究動向にもふれながら、以下の4篇の論考のおおむねの配置図を略示することにしよう(※1)。

1　本書は、2016年10月21日に関西大学で開催された日本独文学会秋季研究発表会での同名のシンポジウムにもとづく。本稿は、三谷が司会者として各報告に先立っておこなった総論的解説を拡張したものである。

研究史を振り返って

世紀転換期のプラハからドイツ語作家たちが輩出したことは、当時すでに注目を集めていた。彼らをまとめて論じる雑誌記事なども比較的早くから散見される(※2)。しかし、〈プラハのドイツ語文学〉を20世紀のドイツ文学、ひいてはヨーロッパ文学を考えるうえで見逃すことのできない現象ととらえ、その全体像を究明しようという研究プログラムは、1960年代にはじめて、チェコスロヴァキアのドイツ文学研究者ゴルトシュテュカーによって提唱された(※3)。もともとカフカ文学の再評価と緊密に連動していた彼の提案には、スターリン死後の「雪解け」のなかで社会主義諸国における教条的な文化政策への批判が高まり、チェコスロヴァキアでは「プラハの春」の民主化運動として展開したという社会情勢が深い影を投げかけている。そのため、1968年に「プラハの春」が挫折すると、研究もいったん停頓を余儀なくされた。あらたに大きな展開が見られたのは、1980年代後半から1990年代にかけてである。

この局面を底流で支えたのもカフカ研究、とりわけ校訂版全集の編纂とそれに並行してのプラハの社会的・文化的環境の掘り起こし作業だった(※4)。だが、そうした文学研究の進展をはるかに越えて、まったく新しい状況を生み出したのが、ベルリンの壁の崩壊に端を発する東欧諸国の体制転換と東西冷戦の終結という世界史的な事件であるのは言うまでもない。一次資料へのアクセス条件の劇的な変化によって、忘れ去られていた作家の再評価と作品刊行がすすみ、また彼らが置かれていた社会史的状況、ことにユダヤ人の境遇にさまざまな角度から検討が加えられるようになった。その結果、当時のプラハ社会の様相についてかなり細かな事実関係が明らかにされてきている。近年は、知識社会学的な視点からドイツ／チェコにまたがる知識人の動きに光が当てられており、今後さらに精緻な考証がすすむものと思われる(※5)。ここでは、1960年代以来の研究史の流れのなかから、重要な里程標となってきた方向性をいくつか確認しておく。

ひとつは、表現主義との関係である(※6)。文学においては、表現主義的なユートピア願望の横溢するヴェルフェルの詩集『世界の友 *Weltfreund*』(1910) が、この潮流の到来を告げる記念碑的作品となった

2　この種の記事は、ブロートなど作家たち自身による記事を別とすると、Körner, Josef: *Dichter und Dichtung aus dem deutschen Prag*. In: *Donauland*. Jg.1, Nr.7.(1917) まで遡ることができる。Vgl. Born, Jürgen / Krywalski, Diether (hg.): *Deutschsprachige Literatur aus Prag und den böhmischen Ländern. 1900-1939*. München 2000, S. 275ff.

3　チェコ語の発音にもとづくカタカナ転写はゴルトシュトュケル。その所説の詳細については、三谷『世紀転換期のプラハ モダン都市の空間と文学的表象』(三元社 2010年) の序章を参照。Vgl. Goldstücker, Eduard / Hofman, Alois / Reimann, Paul (hg.): *Weltfreunde. Konferenz über die Prager deutsche Literatur*. Praha 1967.

4　西ドイツ国内で校訂版編集の中心となったヴッパータール大学では、編者のひとりボルンが「プラハのドイツ語文学研究センター」を率いて、研究の文献学的基盤を構築した。彼が深く関わった80年代末の国際シンポジウムは、その後の進展を先取りするものとなった。Vgl. Österreichische Franz Kafka-Gesellschaft (hg.): *Prager deutschsprachige Literatur zur Zeit Kafkas.* Schriftenreihe der Franz Kafka-Gesellschaft 3. u. 4. Wien 1989/1991.

5　Vgl. Höhne, Steffen / Ohme, Andreas (hg.): *Prozesse kultureller Integration und Disintegration. Deutsche, Tschechen, Böhmen im 19. Jahrhundert.* München 2005. Höhne, Steffen / Udolph, Ludger (hg.): *Deutsche – Tschechen – Böhmen. Kulturelle Integration und Disintegration im 20. Jahrhundert*. Köln 2010. 2011年以降、ヘーネの編集するシリーズ Intellektuelles Prag im 19. und 20. Jahrhundert が、ベーラウ社から継続的に刊行されている。

6　こうした理解は、ゴルトシュテュカーの研究プログラムのうちに当初から内包されており、とりわけクロロプによって丹

が、その刊行を契機に周囲のプラハの若手作家も相次いで、新興文学の書き手として紹介されていった。いったい表現主義を含むモダニズムの芸術運動は、新興出版社とその雑誌ジャーナリズムとの結びつきが強く、作家同士もそうした出版ネットワークを介して相互に影響を与え合いながら創作を展開することが多い。プラハの作家たちの場合は、かねてからベルリンやライプツィヒの出版人とつながりのあったブロートが身近な文学青年を積極的に斡旋、とりわけクルト・ヴォルフに紹介した。じっさいカフカ、バウム、ウルツィディール、マイリンクがヴォルフ書店の「最後の審判の日」叢書として作品を発表しているし、ヴェルフェルにいたっては同書店編集部に籍を置いている(※7)。こうしたことから、プラハの作家たちと表現主義文学との関係が早くから注目され、それはまた同時に、唯美主義や新即物主義といった前後する文芸思潮を参照して〈プラハのドイツ語文学〉全体を通時的にとらえる作業にも道をつけることになった。カフカやヴェルフェルなどの世代が表現主義的だとすれば、先行するリルケやレッピンなどは唯美主義的と評価され、さらに後続のヴァイスやウンガーは新即物主義的と整理される。このように理解すると〈プラハのドイツ語文学〉は、イズムの交替によってモダニズム文学の消長を説明する従来からの文学史の枠組に比較的容易に収まる(※8)。

ところで、表現主義をはじめとするモダニズムの芸術潮流は、ブルジョワ社会の爛熟ないし閉塞、都市の近代化と大衆化、科学やテクノロジーの革新といった時代状況に深く規定される一方、文学、美術、建築、音楽などの諸分野を横断し融合させるものだった。この両面が接するときに生じるダイナミズムを具体的に検討するとき、議論の焦点として浮上するのが文化生成の場としての都市にほかならない。そのさいプラハは、世紀転換期から両大戦間にいたる時期のドイツ語圏におけるモダニズム芸術の拠点として、ウィーン、ベルリン、ミュンヘン、さらにはチューリヒに伍する都市と見なされたのである。しかしまたプラハは中世以来、チェコ人・ドイツ人・ユダヤ人が生活をともにする多言語・多文化の環境を有する点で、他の都市とは決定的に性格を異にしていた。世紀転換期当時、プラハのドイツ人社会はすでに少数派コミュニティとなっていた一方、同化ユダヤ人の社会進出はベルリンやウィーンに比べると遅かった。結果としてユダヤ系作家たちは、ドイツ／チェコの民族対立がもっとも深刻な時期に自己を形成したのである。当然、こうした歴史的状況の検証が〈プラハのドイツ語文学〉研究にとって不可欠となった。それはつまるところ、ナショナリズム紛争のただなかに置かれた彼らユダヤ系知識人が、どのような経過で自身のユダヤ性を意識し、また位置づけたかという問いである。

この点にかんして格好の検討対象になったのもカフカだった。彼の生活史の究明はおのずと、19世紀後半のプラハ・ドイツ系ユダヤ人コミュニティの実態、またユダヤ系知識人青年の動向を明らかにす

念に考証されている。Vgl. Krolop, Kurt: *Zur Geschichte und Vorgeschichte der Prager deutschen Literatur des „expressionistischen Jahrzehnts“*. In: Goldstücker u. a.: a.a.O., S. 47-96. Fiala-Fürst, Ingeborg: *Der Beitrag der Prager deutschen Literatur zum deutschen literarischen Expressionismus.* St. Ingbert 1996.

7 プラハの作家たちと出版社とのつながりに光を当てたものとして、以下の展覧会カタログが重要である。Vgl. Wichner, Ernest / Wiesner, Herbert (hg.): *Prager deutsche Literatur vom Expressionismus bis zu Exil und Verfolgung.* Berlin 1995. この展覧会については、三谷『境界としてのテクスト　カフカ・物語・言説』(鳥影社 2014) 所収の「展示された文学史」を参照。

8 Vgl. Sudhoff, Dieter / Schardt, Michael (hg.): *Prager deutsche Erzählungen*. Stuttgart 1992, S. 9-46.

る作業に直結したからである(※9)。険しさを増していく民族対立のはざまで、ドイツ語とその文化に同化して社会の各方面に進出したユダヤ人は、チェコ人からは敵視される一方、ドイツ人から好意的に受け入れられたわけでもなかった。そうしたマージナルな立場を痛感したとき、若いユダヤ系知識人たちは、ドイツ的教養をバックボーンにしながらも、ユダヤ人としてのアイデンティティの回復を鼓吹するシオニズムに惹きつけられていく。しかしながら、シオニズムじたいかなりの思想的振幅を含んでいたうえ、第一次世界大戦、ロシア革命、ハプスブルク帝国の解体、ワイマール共和国の成立といった世界史的事件により社会情勢が揺れ動くなかで、彼らのユダヤ性にたいする態度はそれぞれに変化した。そうであればこそ、作家たちが自身のユダヤ性をいかに理解・実践し、なにより文学として表現していったのかを検証する作業が、〈プラハのドイツ語文学〉をこの地域の歴史的状況に即して考えるうえでの大きな課題となったのである。

そもそもユダヤ性にかかわる議論はナショナリズムの問題と表裏一体の関係にある。だが、プラハの場合、ドイツ／チェコのナショナリズム対立の焦点はなにより言語であった。学校での授業・試験や官庁での事務処理から劇場での上演、さらには街路名の表記にいたるまで、言語はつねに紛争の種だった。通常ならば都市部にはまず見られないドイツ語の言語島 Sprachinsel が、隣接する郊外を含めると人口50万を数えるプラハの歴史的街区に厳として存在し、周囲のチェコ（語）社会とは疎遠な生活を送っている――こうした社会像の当否、またなによりこの閉鎖的な社会で用いられていたドイツ語の特性をめぐっては、すでに19世紀末当時からさまざまな評価があった(※10)。プラハに、チェコ語の干渉を受けたピジン・ドイツ語が流通していたことはまちがいなく、それがひるがえってプラハ・ドイツ語の真正性／逸脱性と個人のナショナルアイデンティティとのあいだに照応関係をみる議論をも呼び起こしたのである。そして、このような事態にもっとも鋭敏にならざるをえなかったのもユダヤ人だった。

そもそもボヘミアに住むユダヤ人の日常的な言語生活は、イディッシュ語とドイツ語とチェコ語が並立する複数性を特徴としていた。だが19世紀半ば以降、中世以来のさまざまな差別的処遇の撤廃によりユダヤ人が急速にドイツ（語）文化に同化した時期は、チェコ語／ドイツ語という言語的境界によってボヘミア社会が分断されていく時期に当たる。プラハ・ドイツ語の真正性を疑う言説もまた同時期に登場した。こうした状況は、母語をもって個人の言語的アイデンティティを確証するという理解を揺るがせ、母語、さらには言語そのものにたいする批判的考察にもつながっていく。この点で〈プラハのドイツ語文学〉は、マウトナーに発する言語批判、あるいはホーフマンスタールをとらえた言語危機と問題を共有するとともに、いわゆる「マイナー文学」論とも近接するのである。それはまた、すでに見たナショナルアイデンティティの問題とも交差しており、さまざまな角度からの考察を促すこ

9　この方向での具体的検討は、Stölzl, Christoph: *Kafkas böses Böhmen. Zur Sozialgeschichte eines Prager Juden.* München 1975. のような歴史研究が先行した。またユダヤ研究として Kieval, Hillel: *The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia, 1870-1918*. New York 1988. プラハ・ドイツ人社会史の考察として Cohen, Gary: *The Politics of Ethnic Survival. Germans in Prague, 1861-1914*. 2nd. Edition. West Lafayett, 2006. もきわめて重要。本格的な文学研究は Pazi, Margarita: *Fünf Autoren des Prager Kreises: Oskar Baum, Paul Kornfeld, Ernst Sommer, Ernst Weiss, Ludwig Winder*. Frankfurt a. M. 1978. などがもっとも早い成果である。

10　プラハ・ドイツ語の特殊性をめぐる議論は1880年代にまで遡り、作家・批評家・言語学者を巻き込んだ長い歴史をもつ。Vgl. Born: a.a.O., S. 307ff. 現在の研究状況については、本書第1章を参照。

とになった(※11)。

他方、チェコ語とその文化がいかに理解されたかの検討も、〈プラハのドイツ語文学〉の重要なテーマである。文化的他者としてのチェコ人が、女性性と強く結びついて表象されることは早くから指摘されており、そこに男性中心主義的な一種のコロニアリズム思考が働いているのはまちがいない(※12)。こうした他者表象の問題とならんで重要なのは、翻訳を介したチェコ語文化とドイツ語文化の相互理解の企図である。ここでも中心的な役割を果たしたのはユダヤ系知識人だった。ブロートのみならずピックやフクスなどが、対立する両民族のあいだを調停するため、チェコ語文学のドイツ語への紹介・翻訳に積極的に取り組んでいる。現在、こうしたトランスナショナルな活動の検証は、文学だけでなく学術全般に及びつつある。それは、19世紀的な人文学知が言語民族主義によって分画されることで陥った隘路を確認すると同時に、それを超出する可能性がどこにあったかを探求することにつながるものと言えよう。

近年の研究動向から

ヨーロッパが東西冷戦構造の終焉からEUの東方拡大へとすすむなか、〈プラハのドイツ語文学〉の検証は、つぎつぎに発掘される多くの一次資料をもとに、加速度的に詳細なものになっている。研究が成熟期を迎えているわけだが、裏を返せばそれは飽和状態に達したということでもある。その状況を如実に示しているのは、いわゆるズデーテンラント出身者のドイツ語文学をも視野に収めることにより、〈プラハのドイツ語文学〉を相対化しようという動きが出てきたことだろう(※13)。従来、都市プラハとズデーテンラントとは二項対立的にとらえられてきた。つまり、前者の文学がユダヤ系作家を主たる担い手とし、モダニズム的かつ反ナショナリズム的であるのにたいし、後者の文学はアンチモダニズム的で郷土主義的、ときにドイツ国粋主義とも親和性をもつと位置づけられてきたのである。これにたいし新たな動きの背景にあるのは、従来の対立図式を下支えしている政治性を離れ、あわせて第二次世界大戦後にチェコスロヴァキアから追放された結果、忘れ去られてしまったドイツ語作家たちの存在にも積極的に光を投じようという問題意識にほかならない。そこには、プラハを語ることに終始する首都偏重の思考を崩そうとするチェコ国内のローカリズムの自己主張もまた窺われる。

ひるがえって考えれば、〈プラハのドイツ語文学〉という用語における形容詞Pragerの意味内容はそもそも、けっして厳格に規定されていたわけではない。たとえばリルケはプラハ生まれではあるが早く

11 Vgl. Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen:„ ... in einem Stockwerk des innern babylonischen Turmes ...“*. Tübingen 2003. Nekula, M. / Koschmal, Walter (hg.): *Juden zwischen Deutschen und Tschechen. Sprachliche und kulturelle Identitäten 1800-1945*. München 2006.

12 もっとも早い議論としてEisner, Pavel: *Milenky. Německý básník a česká žena*. Praha 1930. 新しい研究としてTakebayashi, Tazuko: *Zwischen den Kulturen. Deutsches, Tschechisches und Jüdisches in der deutschsprachigen Literatur aus Prag*. Hildesheim 2005. などがある。

13 Vgl. Lahl, Kristina: *Das Individuum im transkutlurellen Raum. Identitätsentwürfe in der deutschsprachigen Literatur Böhmens und Mährens 1918-1938*. Bielefeld 2014, S.33-88. Krappmann, Jörg: *Allerhand Übergänge. Interkulturelle Analysen der regionalen Literatur in Böhmen und Mähren sowie der deutschen Literatur in Prag (1890-1918)*. Bielefeld 2013.

にミュンヘンに去っており、したがってプラハ経験を背景とした作品は若書きにとどまる。『ゴーレム』の作者グスタフ・マイリンクは、プラハで銀行家として生活した時期があるとはいえ、本格的に創作活動に取り組んだのはミュンヘンに移ってからだった。カフカの友人でもあるエルンスト・ヴァイスは、モラヴィアの中心都市ブルノに生まれ、プラハでの大学生活ののちベルリンに出てようやく本格的に創作を開始している。つまり〈プラハのドイツ語文学〉とは、時間的な長短はともかく、この都市の多民族・多言語の社会を経験した作家たちをゆるやかに繋ぐキーワードと理解するべきだろう。だとすれば、濃淡の差こそあれ、プラハのみならずボヘミア、モラヴィア全域を覆っていた複数文化的な環境の探求が、さらなる課題として浮上してくることは、ごく自然な流れといわねばならない。それによって、プラハとそれ以外の――ボヘミア、モラヴィアのみならずベルリン、ウィーン、ライプツィヒなども含む――諸地域とのあいだの人・モノ・情報の移動状況もまた見えてくると思われる。いずれにせよ、有力なユダヤ系知識人がプラハを去ってしまったあと、1920年代後半から第二次世界大戦前夜にかけてのこの地域のドイツ語文学について、あらためて検討を加える必要があるのはまちがいない。

しかしながらそうした方向が、あまりに微視的な郷土文学史研究に陥ってしまうならば、〈プラハのドイツ語文学〉研究が本来もっていた意味は大きく損なわれる。議論の起点にはつねに複数の文化――ドイツ／チェコ、ナショナリズム／反ナショナリズム、都市／地方はみな文化的対立の諸項といえる――の接触と摩擦があり、その界面において生成・変成する芸術や文化のかたちこそが問い続けられねばならない。これまでの論点にくわえて必要なのは、モラヴィアやズデーテンラントの地域性を背負った作家たちを発掘する作業をへて、ドイツ／チェコという言語的境界線がプラハとは異なったかたちで引かれ、あるいは越えられている点を検証すること、さらには広義のボヘミアとそれ以外の複数言語地域とを比較検討することだろう。

とはいえ、日本にいる私たちの場合、各種の一次文献のオンライン化がすすむ環境にあるとはいえ、忘れ去られた作家たちの発掘作業に直接に参画することはきわめてむずかしい。また、それが取り組むべき唯一の方向でもない。今後欠かせないのはむしろ、ドイツ／チェコという言語的・文化的境界を超える横断的研究を構築すること、つまりゲルマニスティクとスラヴィスティクという19世紀的な学知の区分をとらわれずに、この地域の文化現象のトータルな理解を目指すことだろう。それはドイツとユダヤの関係という主題を、中欧というより大きなコンテクストのなかに位置づけていくことにも繋がる。また都市とモダニズム文学と都市の問題も、ベルリンやウィーンといったドイツ語圏の中心都市ではなく、たとえばブレスラウやトリエステといった境界的な都市との対比をとおして、より多角的に再検討されるべきである。

本書の論点

以上のような問題意識を共有し、とりわけ言語によって分画された「ネイション」の枠組を相対化することを心がけながら、〈プラハのドイツ語文学〉について今後語られうる4つの方向性を提示するのが本書の企図である。それらはあくまで仮設的な方向であり、いわば補助線にすぎない。それぞれの意義と有効射程、さらには相互の関連を検討することで、〈プラハのドイツ語文学〉というテーマの今後を

展望する――私たちが企画したシンポジウムとそれにもとづく本書の諸論考が、いささかなりともその役割を果たすことを切に願うものである。

以下、各論考を簡単に紹介しておきたい。

第1章「マウトナーからカフカへ――多言語状況の痕跡」（川島隆）は、マレク・ネクラなどによる最近の研究成果をふまえて、プラハの文化状況を規定していた多言語環境を検討する。同地におけるドイツ語とチェコ語の併存とその政治的・社会的含意については、これまでにも多くが語られてきた。そうした議論を経由してあらためて文学テクストに向かい合うとき、そこから何を読み取ることができるのか――本論考はこの可能性について、マウトナーの『ブラトナ最後のユダヤ人』（1887）との比較をとおして、都市プラハの社会的現実を指示することを意識的に避けているカフカの『訴訟』（1915）から、ボヘミアの多言語状況を焙り出すことをめざす。それは、テクストからコンテクストへと進展してきた研究にたいし、コンテクストからテクストに立ち戻る道筋を具体的に例示しようという試みである。

第2章「世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア」（中村寿）は、1907年から1938年までプラハで発行されていた週刊新聞『自衛 *Selbstwehr*』の立場を明らかにするとともに、文芸欄に掲載された作品『洗礼を受けた女』（1907）を取り上げ、同紙の主張との関連を考察する。ユダヤ人は宗教と不可分の、自立したひとつのネイションとしてドイツ、チェコのネイションと同等の位置を占め、さらには両者の対立を調停する役割を担うべきであるという『自衛』の立場は、世俗的な同化主義に対抗する一方、多民族国家オーストリアの国家理念には親和的だった。本論考は、この主張がプラハを発信地とするドイツ語メディアによって流通し、またその文芸欄を介してカフカなどユダヤ系作家たちの創作活動とも地続きになっていた様相に光を当てる。

第3章「カフカに見る「チェコ文学」との交点――ニェムツォヴァーとランゲルを介して」（阿部賢一）は、チェコ語文学とドイツ語文学とのあいだの相互テクスト的関連を具体的に検証することで、多言語空間としてのボヘミアの文学的複層性を明らかにする。カフカの背後にチェコの国民的作家ニェムツォヴァーが、そのニェムツォヴァーの背後にシュティフターやエーブナー＝エッシェンバハが読み込まれる。またカフカがヘブライ語学習を介してチェコ系ヘブライ語詩人ランゲルと交流し、そのランゲルはイディッシュ語文化にふれることでハシディズム的世界を作品化している。このように言語的境界を超えてイメージやメッセージが受け渡され、共有され、さらに変形されていく過程を追跡する作業は、中欧に多く存在した多言語地域とその文化を比較検討する可能性をも強く示唆する。

第4章「ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉の継受」（島田淳子）は、第二次世界大戦後に登場したチェコ系ドイツ語作家の存在に着目し、その創作活動を支えていたものが〈プラハのドイツ語文学〉との関わりのうちに自己を定位しようとする意識であったことを考察する。ライネロヴァーが同時代人としてドイツ語作家たちと交流し、その経験を伝えるためドイツ語執筆を選択したのにたいし、1968年のチェコ事件後に西ドイツへ移ったモニーコヴァーにとって、チェコ語でなくドイツ語で創作することは、カフカ文学との生産的対決をへた結果であった。それは〈プラハのドイツ語文学〉が内蔵していた越境的性格を更新する試みであり、〈プラハのドイツ語文学〉がたんなる歴史的現象に終わらず、アクチュアルな問題として再来する姿をみることになる。

各論考はそれぞれ異なった方向をめざしているが、Dreivölkerstadt としてのプラハの文化的多層性を

具体的に掘り下げていくという点では、軌を一にしている。ドイツ／チェコという言語的・文化的境界を超える横断的研究はようやく緒に就いたばかりであり、本書の成果をもとに、今後とも研究ネットワークの拡充と方法・内容の深化に努めていきたい。またシンポジウム当日には、フロアから多くの貴重な指摘や助言をいただいた。各論考は、それらにたいするレスポンスも含め、当日の報告に加筆修正を加えている。熱心に参加いただいた方々に、あらためて心から感謝を申し上げるしだいである。

第１章

マウトナーからカフカへ ―― 多言語状況の痕跡

川島　隆

従来、〈プラハのドイツ語文学〉研究のひとつの原動力となってきたのが、この文学を一種の植民地文学として読む方向である。ドイツ系住民がチェコ系住民を支配する状況から、次第にチェコ系の勢力が増大して文化的なヘゲモニーを握るに至る過程は、たしかに植民地の独立運動に典型的に見られる、民族的・言語的アイデンティティの闘争にほかならない(※1)。1911年12月25日の日記で、カフカは主にポーランドのユダヤ人文学を念頭に置きつつ、「小さな民族の文学」の可能性を考察した(※2)。この日記記述を手がかりに哲学者ドゥルーズと精神分析家ガタリが提唱した「マイナー文学」論(※3)は、およそ植民地主義的なもの（＝再領域化）を否定しつづける「脱領域化 déterritorialisation」をカフカ文学に読み込むことで、脱領域的なカフカ文学とそれ以外、という二項図式にプラハのドイツ語作家たちを当てはめて単純に色分けしてしまう弊害をはらみながらも、プラハの多言語状況に取り組む研究者たちの問題意識を繰り返し刺激してきた(※4)。

だが、当のカフカ自身が実際に書いた文学作品を同時代プラハの多言語状況に引きつけて解釈するのは容易ではない。彼が残した文学的テクストにおいては、他のプラハのドイツ語作家たちの作品を特徴づける多言語状況の描写が欠落している、あるいは周到に消し去られているからである。

とはいえ、時代状況や個人的な状況を鑑みるに、カフカが同時代プラハにおける複数の言語のぶつかり合いや摩擦といった問題に無関心でいられたはずはない。そうした問題が彼のテクストにいわば「痕跡」として残存していることを、本稿では、カフカと同じプラハ出身のドイツ語作家フリッツ・マウト

1　プラハのドイツ系ユダヤ人がいかに周囲のチェコ人社会から孤立していたかを強調したパヴェル・アイスネルの「三重のゲットー」論は、植民者（＝本来いるべき場所にいない者）ゆえの根なし草の存在としてプラハのドイツ語作家を位置づける言説の典型例である。パーヴェル・アイスナー『カフカとプラハ』（金井裕・小林敏夫訳）、審美社、1975年。プラハのドイツ語作家たちを「プラハ・サークル」と命名してその独自性を主張したマックス・ブロートは、「三重のゲットー」論を拒絶し、ドイツ系とチェコ系の融和の側面を強調する。Brod, Max: *Der Prager Kreis*. Frankfurt a.M., 1976, S. 41. ただし、これとて植民者の側からの一種の自己弁護と見なす解釈は可能であろう。

2　Kafka, Franz: *Tagebücher*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch/ Malcolm Pasley/ Michael Müller. Frankfurt a.M., 1990, S. 312ff.

3　ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『カフカ　マイナー文学のために』（宇波彰／岩田行一訳）、法政大学出版局、1978年。

4　スコット・スペクターは、カフカ以外のプラハのドイツ語作家たちにも脱領域的な性格を広範囲に認める。Spector, Scott: *Prague Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle*. Berkeley, 2000. さらに一歩踏み込み、プラハのドイツ語作家のみならず、いわゆるズデーテン地方のドイツ語作家たちにも同様の性格を認めようとする議論もある。Jäger, Christian: *Minoritäre Literatur. Das Konzept der kleinen Literatur am Beispiel prager- und sudetendeutscher Werke*. Wiesbaden, 2005.

ナーを補助線としてカフカを読み直すことで明らかにしていきたい。具体的には、一世代上のマウトナーがプラハおよびボヘミアの地方都市を舞台に民族と言語の衝突を描いた小説『ブラトナ最後のドイツ人』(1887) と、カフカの長編断片『訴訟』とを比較することが本稿の主な作業となる。

1. プラハの多言語状況

まず最初に、19世紀から20世紀初頭にかけてのプラハの言語問題について、ごく簡単にまとめておく。

チェコ人の民族主義の最初の萌芽が見られるのは、19世紀初頭のことである。注意すべきは、チェコ・ナショナリズムの形成がチェコ語という言語の形成と常に連動していたという点である(※5)。当時、ヘルダーの言語思想の影響を受けたヨゼフ・ドブロフスキーやヨゼフ・ユングマンらが、チェコ語辞書の編纂活動などを通じて「チェコ語復興」をめざした。ただし、これはいまだ一部の知識人の運動にとどまっていた。しかし、ボヘミア地域の工業化にともないチェコ系ブルジョワ層が形成された1860年代には、本格的なチェコ・ナショナリズムが大衆レベルにまで波及する。1861年に創刊されたチェコ語の日刊紙『ナーロドニー・リスティ（国民新聞）』や、1868年に建設が始まった「国民劇場」が、ナショナリズム形成の軸となった主要なメディア装置であった。

この動きと並行して、ドイツ語が公用語として通用していたボヘミア州においてチェコ語を公用語として認めさせる運動が本格化する(※6)。1880年に公布されたターフェ言語令は、ボヘミア州の官庁で窓口対応に用いられる言語（外務語）に関して、チェコ語をドイツ語と対等な使用言語として位置づけた。さらに1897年のバデーニ言語令は、官庁の内部文書で用いられる言語（内務語）に関してもチェコ語とドイツ語の対等性を認めた。この動きにボヘミアのドイツ系住民は猛反発し、オーストリア皇帝がバデーニ首相を罷免するという非常事態に発展した。こうして1899年にバデーニ言語令は撤回され、ターフェ言語令下の状況が復活する。当然ながらチェコ系住民は怒り、デモや集会、さらには暴動が繰り返された。――1883年生まれのカフカは、こうした不穏な状況を目の当たりにしながら成長したのである。

2. マウトナーの『ブラトナ最後のドイツ人』

2.1 マウトナーの言語観

以上の流れに敏感に反応したプラハのドイツ語作家の代表格が、マウトナーだった。カフカの親世代にあたるマウトナーは、ジャーナリストにして作家、ベストセラーになった三巻本『言語批判論集』(1901/02) で言語懐疑の哲学者としても名を上げ(※7)、その一方で第一次世界大戦中は熱狂的なドイツ・

5　Kořalka, Jiří: *Fünf Tendenzen einer modernen nationalen Entwicklung in Böhmen.* In: *Österreichische Osthefte* 22 (1980), S. 199-213. 石川達夫『チェコ民族再生運動　多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』、岩波書店、2010年。

6　Švingrová, Simona: *Tschechisch oder Deutsch? Auf dem Weg von Konkurrenz zu Dominanz. Zum Einsatz von innerer und äußerer Amtssprache in der Arbeiter-Unfall-Versicherungs-Anstalt im Prag der Kafka-Zeit (1908-1922).* In: Nekula, Marek u.a. (Hrsg.): *Sprache und nationale Identität in öffentlichen Institutionen der Kafka-Zeit*. Köln, 2007, S. 129-149.

7　Kühn, Joachim: *Gescheiterte Sprachkritik. Fritz Mauthners Leben und Werk*. Berlin, 1975.

ナショナリストとして活動した(※8)、多面的な人物である。

彼は1849年にボヘミア北東の小都市ホジツェのユダヤ人家庭に生まれ、幼くして家族とプラハに移住する。彼はこの町で、民族・言語対立の激化を、文字どおり身をもって体験した。彼は自伝『プラハの青春時代』(1918) において、その状況を詳しく描いている。

興味深いことに、幼いマウトナーは自らが身を置く多言語状況をそれなりに楽しんでいたことが窺える。彼は、同じひとつのものでもボヘミア語 (チェコ語) とドイツ語で呼び名が違うことを面白がり(※9)、ものの名前をあれこれと母親に尋ね回って喜んでいたのである(※10)。しかし彼の父親は、おそらく同化ユダヤ人としての意識から、言語の純粋性を偏執的なまでに重視し、ドイツ語にチェコ語の語彙が混ざった「台所ボヘミア語 Kuchelböhmisch」や、ドイツ語にイディッシュ語が混入した「マウシェル・ドイツ語 Mauscheldeutsch」を激しく嫌悪し、あまり言語学的な知識がないにもかかわらず、「純粋」な「標準ドイツ語」を子どもたちに教え込もうとした。

> 父は、ほんの少しでも台所ボヘミア語やマウシェル・ドイツ語のなごりがあれば軽蔑し、容赦なく駆除しようとした。それほど語学の素養があったわけでもないのに、純粋なドイツ語、過度に純正主義的な標準ドイツ語を私たちに教え込もうとした。(※11)

マウトナーは、このように「純粋」さを言語に求めた父への反発から、そのようなドイツ語に違和感を抱くようになる。そして彼は、ギムナジウム卒業時に行った南ドイツ旅行でドイツ語の方言の豊かさに触れた経験から(※12)、プラハのドイツ系住民はそもそも人工的な「貧しい」言語、すなわち「紙のドイツ語 Papierdeutsch」を話しており、生き生きとした方言、すなわち「母語」から疎外されていると考えるようになる。

> 私は自らの内なる言語活動において、方言というものの力と美を持ってはいない。もし誰かが、方言を持たない者は本物の母語を持っていないのだと言ってきたとしたら――私は若いころと同様にどなり返すだろうが、それは嘘だと咎めることはできないだろう。[…] ボヘミアの内奥で、チェコ人の田舎者どもに取り巻かれているドイツ人は、ドイツ語の方言を話してはいない。紙に書かれたドイツ語を話しているのだ。耳と口がスラヴ語の発音に染まりきっていなければ、の話であるが。

8　Stachel, Peter: *„Die nüchterne Erkenntniskritik hat vorläufig zu schweigen". Fritz Mauthner und der Erste Weltkrieg oder Die Geburt der Sprachkritik aus dem Geist des Nationalismus.* In: Ernst, Petra/ Haring, Sabine/ Suppanz, Werner (Hrsg.): *Aggression und Katharsis. Der Erste Weltkrieg im Diskurs der Moderne*. Wien, 2004, S. 93-134. 川島隆「マウトナーのナショナリズム思想の展開　言語批判と「母語」礼賛のはざまで」、城眞一編『プラハとダブリン　20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス――フリッツ・マウトナーとその射程』、日本独文学会研究叢書97号、2013年、38-53ページ。

9　Berger, Tilman: *Böhmisch oder Tschechisch? Der Streit über die adäquate Benennung der Landessprache der böhmischen Länder zu Anfang des 20. Jahrhunderts.* In: Nekula, Marek u.a. (Hrsg.): *Franz Kafka im sprachnationalen Kontext seiner Zeit: Sprache und nationale Identität in öffentlichen Institutionen der böhmischen Länder*. Köln, 2007, S. 167-182.

10　Mauthner, Fritz: *Erinnerungen I. Prager Jugendjahre*. München, 1918, S. 33.

11　Ebd., S. 34.

12　Ebd., S. 143.

> 大地に根ざした表現の豊かさがなく、方言ならではの形態の豊かさがない。この言語は貧しい。方言の豊かさが失われるとともに、方言のメロディもまた失われてしまっている。(※13)

マウトナーは、一方では雑種的な言語への生理的な忌避感を父から受け継ぎつつ、他方では「紙のドイツ語」の「貧しさ」を意識し、「大地に根ざした」母なる言語の豊かさに憧れることになったのである。

現在の研究においては、当時のプラハのドイツ語がそのような「紙のドイツ語」だったという見方は一種のフィクションであり、言説にすぎないという見解が主流になっている(※14)。しかし、この言説は同時代に大きな影響力を発揮し、マウトナーの息子世代、つまりカフカの世代のドイツ語作家たちは、おしなべて自分のドイツ語は人工的で「貧しい」言語だという疎外感を植えつけられていた。のみならず、後世の研究者たちも同じ図式を受け継ぎ、「プラハ・ドイツ語」の貧しさからカフカ文学の特徴を論じることは珍しくなかった(※15)。

2.2『ブラトナ最後のドイツ人』に見る言語問題

1876年にベルリンに活動の場を移したマウトナーが1885年に書き、1887年に出版した小説『ブラトナ最後のドイツ人』は(※16)、ボヘミア南西部の地方都市ブラトナを舞台に、民族・言語対立を描く。チェコ人による古文書の捏造事件に取材した『ボヘミアの手稿』(1895年執筆、1897年出版)と並び、この小説には、マウトナーの言語観がよく表れていると同時に、1880年のターフェ言語令を受けてドイツ系住民が抱いた危機意識が濃厚に刻印されている(※17)。

主人公のドイツ系青年アントン・ゲーゲンバウアーは、サトウダイコンから砂糖を精製する工場の経営者の息子である。この若者と、幼なじみのチェコ系青年ザボイ・プロコプの友情と対立がストーリーの軸で、そこにザボイの妹カチェンカとアントンの悲恋が絡む。物語は、少年時代のアントンとザボイ、そしてまだ幼いカチェンカが、採掘を終了した採石場で遊ぶ場面で幕を開ける。

> ボヘミアの小都市ブラトナの町外れの家から遠からぬ場所、道路が険しい切通しを通ってオーバーンドルフの鉄道駅へと続いてゆく場所、ヴォルフスベルクの麓に、放棄された石切り場があった。二人の少年と一人の小さな少女は、これを自分たちの先祖伝来の所有物、自分たちの遊び場、自分たちの博物館と見なしていた。[…]一面のすばらしい景色の中で、石切り場ほど若者たちの気に入っているものは他になかった。仲の悪い父親たちは石切り場の所有権を争っていたが、訴訟が結審す

13　Ebd., S. 51.

14　Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen. „… in einem Stockwerk des inneren babylonischen Turmes…“*. Tübingen, 2003, S. 83ff.

15　たとえば以下を参照。クラウス・ヴァーゲンバッハ『若き日のカフカ』(中野孝次・高辻知義訳)、ちくま学芸文庫、1995年、123ページ以下。

16　Mauthner, Fritz: *Der letzte Deutsche in Blatna*. In: *Ausgewählte Schriften. 4. Band. Böhmische Novellen*. Stuttgart/ Berlin, 1919, S. 1-186. 以下、略号Bにページ数を添えて示す。

17　川島隆「マウトナーの二つのボヘミア小説　同化ユダヤ人の「母語」と民族アイデンティティをめぐって」、神戸・ユダヤ文化研究会『ナマール』18号、2013年、51-61ページ。

る以前から、仲のいい子どもたちはそこの空洞の中で隠れんぼをしていた。(B 3)

物語の開始は1866年、普墺戦争の年のことである。彼らの父親たちは隣人同士だが、石切り場の所有権をめぐって訴訟で争った結果、すっかり仲が悪くなっている。子どもたち同士は親友だったが、ザボイがチェコ人の大人たちの影響を受けていつのまにかチェコ民族主義者に変貌し、チェコ人の民族衣装を着て、「ドイツ人は皆殺し」(B 9) などと言い始めたのでアントンは驚く。

この小説中には、言語というテーマからして興味深い箇所が多々ある。たとえば第2章、プラハの高等専門学校で工学を学ぶアントンが、プラハの下町でチェコ系の人々が集まる酒場を初めて訪れる場面を見てみよう。

プラハは彼［アントン］の目に、古いドイツの町のように見えていた。ただ、身分の低い者のうちにはチェコ系の生まれが大勢いて、教養のある狂信的ナショナリストたちが、小さいけれども声の大きな党派を形作っているのだと。彼の父も、そんなふうに事情を説明してくれていた。どちらの言語も同じくらい下手にしかしゃべれない連中が何千人もいて、ろくに考えもせず自分のことをドイツ系だと思っていたのだ。そちらの方が立派そうに見えるという理由で。[…]
ところが今、彼は突然、異国の地に投げ出された格好だった。このような料亭は町中に何千となくあった。古い看板はドイツ語で書かれていたが、客はみんなチェコ人だとアントンは知っていた。今まで、こういう店の客はスラヴ語の方言だけを話す下層民だと思い込んでいた。それだけに、この質素な居酒屋にチェコ人の中産階級がいるのを目にした彼の驚きは大きかった。チェコ人の中産階級の存在自体を知らなかったのだ。(B 26f.)

この場面は自伝的な性格のもので、マウトナー自身の大学時代の経験が元になっている(※18)。この箇所だけを見れば、自らを「ドイツ系」と位置づけていたアントンがそのアイデンティティを相対化し、他の言語・他の民族への敬意に目覚める契機は十分にありそうに見える。——しかしながら、続く第3章以降では、実際にはこれと逆の展開になる。

地方公務員になったザボイはますます熱狂的なチェコ民族主義者の道を歩み、対するアントンは父の工場を継ぐ。本来は非政治的な人間であったアントンは、ボヘミアの「スラヴ化」と故郷の町の「チェコ化」を目の当たりにし、ドイツ・ナショナリズムに目覚めるのである。

彼ははっきりと見た。スラヴ人の網が国全体に覆いかぶさり、破れがたくなっているのを。ドイツ人は、その網に捕えられた野生動物のように身をすくめていた。ボヘミアの国境を越えるやいなや、もうチェコ人のプロパガンダが目に見えてひしひしと旅人の身に迫ってきた。車掌から駅長に至るまで、鉄道員はみなドイツ人の敵だった。車室で隣り合った人々が、廉価版の新聞や無料で配布されるチラシがドイツ人憎悪を説いていた。先の選挙結果をいまだに国民の祝祭として祝っている

18　Mauthner: *Erinnerungen I*. S. 126.

村々で、色とりどりの旗がドイツ人憎悪を叫んでいた。(B 94f.)

このように、『ブラトナ最後のドイツ人』作中ではチェコ系住民は「ドイツ人憎悪」に駆られた存在として一貫して描かれている。チェコ人たちは居酒屋に集まり、新聞を読みながら議論し、反ドイツの気勢を上げ、老若男女が街頭に繰り出して愛国歌を歌いながらデモ行進する。ドイツ・ナショナリズムは、そこで表現される「憎悪」に対する、いわば正当防衛として提示されることになるのである。

物語は、地元でチェコ語学校を設立する計画が持ち上がる第8章で最高潮に達する。チェコ系とドイツ系の融和のもとにチェコ語学校設立を進めることが地元住民の総意であると謳う決議が、とある「人民集会 Volksversammlung」で採択されようとしていることをアントンは耳にする。そうした集会は、アメリカ合衆国の直接民主主義的な地方自治の理念に掉さす形態で実施されている。

大昔からドイツ人の町であるこの小都市に、チェコ語の小学校が押しつけられようとしていた。その手続きは、他の国境地域で有効性が証明されたものと同じになる予定だった。聖ヨセフ山上で開かれる一般公開の人民集会にて、オーバーンドルフにはチェコ語学校が必要であるとの決議が全会一致ないし圧倒的多数で採択される運びだったのだ。

そういった人民集会――チェコ語新聞では「ミーティング」と呼ばれていた――では、チェコ人とドイツ人の手で決議文が起草されるのが常だった。そこではチェコ語教師が要望されていた。もちろん、当局はこのような要望をけっして断れないのだ。(B 99)

この集会にアントンは単身乗り込み、これを阻止しようとする。彼は、ほかならぬザボイが壇上で両民族の融和をアピールする演説を行っている途中に、「それは嘘だ！」と叫び、実際はいかにチェコ系がドイツ系を憎み、ことあるごとに嫌がらせをしてくるか、いかにチェコ系がドイツ系を支配するための陰謀をめぐらせているかを滔々と訴える。

この場面で、隠れプロテスタントにして隣国プロイセンの手先だとザボイに誹謗されたアントンが行う再反論に、「母語」としてのドイツ語を神聖視する作者マウトナーの主張が集約されている。

私だってカトリック教徒だ。私はきみたちのように信心深くはない。それは認めよう。それでも、神の言葉を自分の母語で、我々の聖なる美しいドイツ語で聴くことができるなら、私は喜んで教会に行くし、教区の民とともに信心を深めもしよう。そうだとも。オーストリア・ドイツ関係をめぐる政治家たちの紛争については、きみたちと同様、私だって何も知らない。両国の首相が誰かすら知らない。政治など知ったことか！ それでも、我々はドイツ人だ。偉大な民族である条件のうち、他のすべてを奪われたとしても、我々のドイツ語だけは渡さない。(B 117)

アントンの演説は、一歩引いて眺めれば単なるヘイトスピーチ以外の何ものでもないが、作中では勇気ある真実の行為として美しく描かれている。この演説に対してドイツ系の聴衆は拍手喝采し、チェコ系は激怒する。当初は民族融和の雰囲気のもとに終わるかに思えた集会は、両陣営の投石による血みど

ろの乱闘で幕を閉じる。

マウトナーは、チェコ系住民をもっぱら陰謀家または狂信的な暴力集団として描き、それに対して故郷の町で最後の一人になるまで抵抗しようとするアントンを一種の英雄として提示した。『ブラトナ最後のドイツ人』は、全体としてドイツ系の立場に立ったプロパガンダ小説にほかならない。ただし、この小説の内容を裏返せば（あるいは裏返すまでもなく）、そこにはチェコ系住民がデモやタウンミーティングや居酒屋談義などを通じて新たに公共圏を形成し、民主主義的なプロセスで植民地支配を脱していく様子を読み取ることができる。

3. カフカの『訴訟』

3.1 カフカとチェコ語

それではカフカに目を移そう。先述のように、カフカはボヘミアの民族対立・言語対立がピークに達した時期に少年時代を過ごした。彼自身の母語はドイツ語であるが、彼の両親の言語については諸説ある。かつては、母親ユーリエはドイツ系ユダヤ人で、父親ヘルマンはチェコ系ユダヤ人であるとの見方が支配的だった(※19)。それは、ユーリエが書いたドイツ語の手紙に文法的な誤りや誤字が皆無に近いこと、一方のヘルマンの手になるものには間違いが多いことによる。国勢調査でカフカ家が「チェコ語」を使用言語と回答している点も、ヘルマンをチェコ系と見なす論拠とされてきた。しかしながら、これはチェコ系の勢力拡大を見据えての打算的な措置であったと現在では考えられている。さらに、手紙のドイツ語に関しても、ヘルマンは貧しい生まれ育ちで教育水準が低く、読み書き自体が苦手だったのであり、そこにチェコ語話者であった証拠を見出すのは難しいとされる(※20)。つまり、ほかでもなくマウトナーの小説中で「どちらの言語も同じくらい下手にしかしゃべれない」（B 26）と言われていた人々――おそらくはイディッシュ語を基盤に、さまざまな言語が混淆した状況下で生きていた人々――の一人がヘルマン・カフカだったのである。

いずれにせよ、息子フランツはプラハの同化ユダヤ人として、ドイツ語が話される家庭環境で育った。ただし、同時代の他の〈プラハのドイツ語文学〉の作家たちと比べると、彼は比較的深くチェコ語の環境に親しんでいた。チェコ文学を愛読し、しばしばチェコ語演劇を観劇し、チェコ人の政治集会にも顔を出した。勤務先の労働者災害保険局では、すでにドイツ語とチェコ語の二重使用が原則になっていた。求職の際の書類では、彼はドイツ語とチェコ語が両方堪能であることを強調している。

> 申請者はドイツ語およびボヘミア語の会話および読み書きに通じており、さらにフランス語と、部分的には英語も習得しております。(※21)

19　ヴァーゲンバッハ前掲書、31ページ。

20　Nekula: *Franz Kafkas Sprachen.* S. 66.

21　この書類自体もドイツ語とチェコ語の双方で作成されている。Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a.M., 1999, S. 85 u. S. 86.

実際、彼のドイツ系の同僚は、チェコ語がとてもよくできるとカフカのことを回想している。それに対してチェコ系の同僚に言わせれば、ぎこちない文章語のチェコ語をしゃべる人、という評価になる。総じてチェコ語を話す・聞く能力はそこそこあり、読むのも得意で、ただし自力でチェコ語の書類を書くのは難しいという水準にあったと言えるだろう。

言語問題に対するカフカの関心は、初期作品『ある闘いの記録』に見られる言語懐疑のモチーフや、イディッシュ演劇への関心から生まれた一連のテクスト（とくに、上述の1911年末の日記記述や、イディッシュ劇団を支援するために行った1912年2月の「ジャルゴンについての講演」）に明瞭に刻印されている。しかし、チェコ語については直接に論じたものがなく、管見のかぎり、明示的にチェコ語とドイツ語の関係をモチーフとして扱った小説作品も見あたらない。したがって、カフカ文学におけるチェコ語という問題設定をする際には、カフカのテクストに残されたかすかな痕跡をたどる作業が必要になるのである。本稿では、彼が主に1914年から翌年にかけて執筆した長編断片『訴訟』をマウトナーの『ブラトナ最後のドイツ人』から読み直すことを通じて、プラハの多言語状況下で生きた作家カフカが自作で何を描いているか、あるいは何を描いていないのかを浮き彫りにしてみたい(※22)。

3.2『訴訟』に見る言語問題（の不在）

この二作品を相互比較の対象として選んだのは、『訴訟』がマウトナーの小説とは逆に、採掘を終了した石切り場（P 310）で物語が終わるからというだけではない。とくに注目したいのは、主人公ヨーゼフ・Kが謎の裁判所から召喚され、最初の予備審問を受ける場面である。この審問は、プラハとおぼしき都市の郊外の、貧しい人々が暮らす団地の一角で行われる。当時、プラハの郊外ではモルダウ左岸のスミーホフ地区、右岸のジシュコフ地区を中心に工業地帯が急速に発達し、周辺の農村地帯から流入したチェコ系の人々が労働者街を形成していた(※23)。カフカが父の出資を受けて経営者として携わっていたアスベスト工場も、ジシュコフにあった。彼は1911年11月18日の日記に、この地区を訪れるたびに感じる生活水準のギャップについての感想を記している。

> 人は異国の都市を事実として受け取るものだ。そこの住民は、我々の生活様式に浸透することなく暮らしている。我々が彼らの生活様式に浸透することができないのと同じことだ。比較はしたくなる。どうしようもなく。けれども、その比較に道徳的な価値がないこと、心理学的な価値すらないことは、よく分かっている。結局、比較を諦めてしまっても別に構わない。あまりにも大きな生活条件の差があり、比較しても仕方ないからだ。それに対し、我々の父なる都市の郊外は、たしかに我々にとって異国のようなものだが、ここで比較する価値がある。半時間も散歩すれば、何度でも証拠が目に入る。人々はここで、部分的には我々の都市の内部に暮らしているのだが、部分的には、貧

22　Kafka: *Der Proceß*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M., 1990. 以下、略号Pにページ数を添えて示す。

23　三谷研爾『世紀転換期のプラハ　モダン都市の空間と文学的表象』、三元社、2010年、306ページ。

しく暗く、大きな切通しのように掘り込まれた辺縁部で暮らしている。彼らはみな、都市の外部の人間集団が持つことは普通ないような、大きな共通の利害関心を持っているにもかかわらず。だから、ぼくは郊外に足を踏み入れるとき、いつも不安や、よるべなさや、同情や、好奇心や、高慢さや、旅の喜びや、男らしさなどの入り混じった感情を抱く。そして快感と厳粛な気持ちと安心とを抱いて戻ってくる。とくにジシュコフに行ったときはそうだ。(P 253)

つまり、カフカが『訴訟』の主人公を郊外に向かわせるとき、念頭に置いていたのはジシュコフなどのチェコ系労働者の住まう地区であった可能性が高い。謎の裁判所に召喚されたヨーゼフ・Kは、いわばドイツ系住民の日常から離れ、チェコ人の世界に足を踏み入れるのである。

ヨーゼフ・Kが出頭する裁判所は、団地の6階の部屋の壁の扉をくぐった先にあるが、入った瞬間、彼は「何かの集会に足を踏み入れた気分」(P 57) を味わう。そこでヨーゼフ・Kが抱く違和感は、たとえばマウトナーが『ブラトナ最後のドイツ人』で書いたような、ドイツ系市民がチェコ系市民の世界に接触した際に感じる驚き、つまり同じ都市の中に異郷の地が隠れているという発見 (B 26f.) に通じるものがある。

さらに興味深いのが、ヨーゼフ・Kが遭遇した「集会」の様子をより詳しく描写した箇所である。

Kは引っぱられるままについて行った。ごちゃごちゃした人ごみの中にも、一本の細い通り道が空いていることが判明した。もしかして、そこで二つの陣営が分かれているのかもしれない。その証拠に、右を見ても左を見ても、最初の何列かでこちらに顔を向けている人はほとんどおらず、背中しか見えなかった。みんな自分の陣営の仲間にだけ話しかけ、身ぶり手ぶりをやってみせているのだ。黒い服が普通だった。裾が長くゆったりした、古い式服だ。この服装にだけは戸惑った。これがなければ、地区の政治集会だとでも思ったことだろう。(P 58)

この箇所の「地区の政治集会 politische Bezirksversammlung」なる文言は要注意である。カフカは当初「社会主義 socialistische」集会と書き、それを「政治」集会に修正した。ここからすぐに連想されるのが、チェコ系の無政府主義者ミハル・マレシュが、チェコ系労働者の社会主義集会にカフカがしばしば足を運んでいたと証言していることである(※24)。マレシュによると、カフカは彼といっしょに警察に拘留されたことさえあるらしい。この証言は、社会主義へのカフカのシンパシーを強調する文脈でよく引用される一方、カフカの非政治性を信奉する研究者には評判が悪く、信憑性を疑問視されている。しかし、こういう政治的な場にいながら一歩引いた場所で観察している姿勢がいかにもカフカらしいと言えるのではないだろうか。

いずれにせよ、ここはカフカの政治的なアンガジュマンの有無を論じる場ではない。注目すべきは、この「地区の政治集会」の描写において、右と左に陣取る「二つの陣営 zwei Parteien」の存在が示唆され

24　Mareš, Michal: *Kafka und die Anarchisten.* In: Koch, Hans-Gerd (Hrsg.): *„Als Kafka mir entgegenkam...". Erinnerungen an Franz Kafka*. Berlin, 1995, S. 81-86, hier S. 82f.

ている点である。これは、マウトナーが描いた「人民集会」の場面と比較してみると興味深い。そこでは、まさにチェコ系とドイツ系という二つの「陣営」の対立が問題になっていたからである。両陣営の様子を、マウトナーは次のように描いている。

> アントンは周囲の人々によって前に押し出され、いきなり雑踏のただ中に立っていた。演壇から30歩と離れていない。
> 右と左に並ぶ団体のメンバーたちに、彼はすぐに顔を悟られた。両側から彼に敵意ある視線と、低い罵り声が浴びせられた。しかし、すぐ目の前に、焦茶色の長い日曜日用の服と高い帽子が見えたので彼は気づいた。おびき寄せられたドイツ系の農夫たちがいるのだ。(B 104)

ここでドイツ系の農夫が身に着けているとされる焦茶色の長い「日曜日用の服 Sonntagsrock」は、カフカの主人公が集会で目にする、黒くて長い「式服 Feiertagsrock」を髣髴とさせる。

ちなみに、ヨーゼフ・Kが裁判所にたどり着く時間は午前「10時」である。「その小さな部屋の中で最初に目に入ったのは、大きな壁時計だった。時計の針は、もう10時を指している」(P 57)。これは、マウトナーの主人公アントンが「人民集会」にたどり着く時間と同じである。「彼が丘の麓にたどり着いたのは、10時だった」(B 102)。もちろん、これだけではカフカが『ブラトナ最後のドイツ人』を念頭に置きながら『訴訟』の予備審問の場面を書いた証拠にはならないかもしれない。しかし少なくとも、マウトナー作品の一種のパロディとしてカフカ作品を読む可能性は開かれているはずである。マウトナー作品において、アントンの演説が（当初は融和しかけていた）「二つの陣営」のあいだに決定的に亀裂を生じさせるのに対し、ヨーゼフ・Kの演説の最後に明らかになるのは、一見すると「二つの陣営」のように見えていたものがじつは一体であるということである。ヨーゼフ・Kは、集会の参加者がみな同じ怪しげな徽章を服に付けていることに気づき、これを、全員が示し合わせて自分を陥れようとしている証拠と解釈する。

> 上着の襟のところに、バッジがチラチラ光っている。大きさや色はまちまちだが。見わたすかぎり、みんな同じバッジをつけている。みんな同じ仲間だったのか。右と左の陣営に分かれていたのは、見せかけか。さっとふり向くと、予審判事の襟にも同じバッジが見えた。予審判事は両手を膝に置き、落ち着いてこちらを見下ろしている。
> 「そういうことか！」とKは叫び、両腕を高々とふり上げた。急に視野が広がったので、腕も広げたくなったのだ。「分かったぞ。おまえら全員、雇われてるんだな。おれが批判していた、腐敗した集団ってのは、おまえらのことだ。おまえらがここに集まったのは、聴衆と見せかけてスパイするためか。二つの陣営に分かれていたのも、見せかけだな。片方が妙に拍手喝采すると思ったら、おれを試してたのか。無実の人間を釣るやり方をお勉強ってわけだ［…］」(P 71f.)

これに対してマウトナー作品では、チェコ系の人々が胸に着けているメダルを、「ドイツ系を殺せ」という意味のシンボルマークだとアントンが指摘する場面がある。

彼［アントン］はザボイの胸からメダルをすばやく引きちぎり、叫んだ。「ここに何と書いてあるか、きみたちも知っているのか？　この集会で我々に配られたりしているメダルが何を言わんとしているか、きみたちも知っているのか？　ここには、はっきりした字で書いてある。『すべての敵に死と地獄を！』とね。ドイツ系をぶち殺せって意味だ」(B 118f.)

こうした箇所を見比べていくと。カフカが――意図してか、意図せずにかはさておき――いわばマウトナー作品を反転させた物語を書いていることが見えてくる。マウトナーが尖鋭化させて描いたチェコ系とドイツ系の対立はカフカにおいては無効化され、両方の陣営からヨーゼフ・Kただ一人だけが疎外されて浮き上がる。そんな構図がここにはある。そこでは、帰属するべきアイデンティティが見失われると同時に、明確な敵を想定することもまた不可能になっている。

少し深読みすれば、同化ユダヤ人としてドイツ文化（とりわけ「母語」としてのドイツ語）に徹底的に同化しようとしたマウトナーに対し、息子世代のカフカは、ドイツ側にもチェコ側にも同化できない状況を描いたのだと読めなくもないだろう。

*

最後に、『ブラトナ最後のドイツ人』のアントンの演説中の一箇所を再度見ておきたい。普墺戦争から兵士たちが戻ってきたとき、チェコ系の兵士はチェコ系の住民に英雄として歓迎されたのに、ドイツ系の兵士は水も飲ませてもらえなかったというエピソードをアントンが語ったのに感動したドイツ系の人々は、「チェコ語学校はいらない！　団結せよ！　我々の子どもたちを渇き死にさせるな！」(B 115) と叫ぶ。これに対し、チェコ系の人々は「ドイツの犬！　水に投げ込んでやれ。のどが渇いてるなら溺れ死ぬまで水を飲ませてやれ！」(B 115) と応じる。――周知のように、謎の訴訟に苦しめられるカフカの主人公は最後に「犬のように」殺されるわけだが、それは「ドイツの犬」としてでは必ずしもない。強いて言えば「ユダヤの犬」としてだろうが、むしろ「どこにも帰属できない犬」としてと言った方が妥当かもしれない。

先行する〈プラハのドイツ語文学〉の作家が取り扱った民族や言語の対立のモチーフを、カフカは微妙に軸をズラしながら継承し、そのイメージを換骨奪胎している。ドイツ語とチェコ語の対立をそのまま描かないこと、言語対立というモチーフが不在であること自体、父親世代の同化志向に反旗を翻した世代のマニフェストになっているのである。

参考文献

Mauthner, Fritz: *Erinnerungen I. Prager Jugendjahre*. München, 1918.

Mauthner, Fritz: *Der letzte Deutsche in Blatna*. In: *Ausgewählte Schriften. 4. Band. Böhmische Novellen*. Stuttgart/ Berlin, 1919, S. 1-186.

Kafka, Franz: *Der Proceß*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a.M., 1990.

Kafka, Franz: *Tagebücher*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch/ Malcolm Pasley/ Michael Müller. Frankfurt a.M., 1990.

Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a.M., 1999.

——

Brod, Max: *Der Prager Kreis*. Frankfurt am Main, 1976.

Jäger, Christian: *Minoritäre Literatur. Das Konzept der kleinen Literatur am Beispiel prager- und sudetendeutscher Werke*. Wiesbaden, 2005.

Kieval, Hillel J.: *The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia, 1870-1918*. New York/ Oxford, 1988.

Kořalka, Jiří: *Fünf Tendenzen einer modernen nationalen Entwicklung in Böhmen*. In: *Österreichische Osthefte*, 22 (1980), S. 199-213.

Kühn, Joachim: *Gescheiterte Sprachkritik. Fritz Mauthners Leben und Werk*. Berlin, 1975.

Mareš, Michal: *Kafka und die Anarchisten.* In: Koch, Hans-Gerd (Hrsg.): *„Als Kafka mir entgegenkam...". Erinnerungen an Franz Kafka*. Berlin, 1995, S. 81-86.

Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen. „ ... in einem Stockwerk des inneren babylonischen Turmes...".* Tübingen, 2003.

Spector, Scott: *Prague Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle*. Berkeley, 2000.

Stachel, Peter: *„Die nüchterne Erkenntniskritik hat vorläufig zu schweigen". Fritz Mauthner und der Erste Weltkrieg oder Die Geburt der Sprachkritik aus dem Geist des Nationalismus.* In: Ernst, Petra/ Haring, Sabine/ Suppanz, Werner (Hrsg.): *Aggression und Katharsis. Der Erste Weltkrieg im Diskurs der Moderne*. Wien, 2004, S. 93-134.

Švingrová, Simona: *Tschechisch oder Deutsch? Auf dem Weg von Konkurrenz zu Dominanz. Zum Einsatz von innerer und äußerer Amtssprache in der Arbeiter-Unfall-Versicherungs-Anstalt im Prag der Kafka-Zeit (1908-1922)*. In: Nekula, Marek u.a. (Hrsg.): *Sprache und nationale Identität in öffentlichen Institutionen der Kafka-Zeit*. Köln, 2007, S. 129-149.

パーヴェル・アイスナー『カフカとプラハ』（金井裕・小林敏夫訳）、審美社、1975年。

石川達夫『チェコ民族再生運動　多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』、岩波書店、2010年。

ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『カフカ　マイナー文学のために』（字波彰／岩田行一訳）、法政大学出版局、1978年。

三谷研爾『世紀転換期のプラハ　モダン都市の空間と文学的表象』三元社、2010年。

第2章

世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア

中村　寿

『自衛――独立ユダヤ週刊新聞 *Selbstwehr. Unabhängige jüdische Wochenschrift*』（以下、『自衛』）は、1907年3月にオーストリア＝ハンガリー帝国ボヘミア王国の首都プラハで創刊され、ナチスドイツによるチェコスロヴァキア侵攻まで継続したドイツ語のユダヤ人新聞である。『自衛』は1938年10月3日付で同年40号を発行して以来、印刷を中断したまま、最終的に廃刊となっている。

創刊号に掲載されている『自衛』の定期購読を勧める広告に眼を通すと、「ボヘミア、モラヴィア、シレジアにおける唯一のユダヤの週刊新聞 Einziges jüdisches Wochenblatt in Böhmen, Mähren und Schlesien」(※1)という宣伝が見つかる。この広告文からは、『自衛』がこれらボヘミア諸邦に居住するドイツ系ユダヤ人の動静を専門的に報道する機関として設立されたことが分かる。同じ号の「読者へ」のコラムには、「ユダヤのものであれば、われわれにとって関係のないものは何ひとつとしてない Nichts Jüdisches wird uns fremd sein.」(※2)という告知がある。これは、この地域に居住するドイツ系ユダヤ人の動向だけでなく、ユダヤ人に関係することならば、ありとあらゆる領域がこの新聞での報道の対象になるという編集方針を明かすものである。

本稿での考察対象は第一次世界大戦の戦前期、ボヘミア王国期の『自衛』である。オーストリア＝ハンガリー帝国という『自衛』にとっての祖国に光をあてることで、この週刊新聞の思想的な輪郭とそれがドイツ文学史に対して与えた影響を、よりくっきりと示すことができるのではないかと考えるからである。

1. 宗教的リベラリズムと「国民的ユダヤ主義」

シオニズムは現在のイスラエル国を理念面から支えるユダヤのナショナル・イデオロギーである。それはユダヤ人をユダヤ教徒であると同時に、ほかの諸国民と対等な権利をもつユダヤの〈ネイション〉であると解釈する。19世紀末、ドイツ語圏を中心に、このイデオロギーの普及に努めた人物がテオドール・ヘルツルである。

ヘルツルは1897年8月29日から31日にかけてバーゼルで第1回シオニスト会議を開催した。彼

1　N. N.: *Einladung zum Abonnement auf die „Selbstwehr."* In: *Selbstwehr. Unabhängige jüdische Wochenschrift (=SW).* 1 Jahrgang, 1907, Nr. 1 (1. März), S. 6.

2　Die Redaktion: *An unsere Leser!* In*: SW.* 1, 1907, Nr. 1 (1. März), S. 2.

は会議の宣伝媒体として、それに先立つ6月、ウィーンを編集拠点に置き、シオニズム新聞『世界 *Die Welt*』を創刊している。その創刊号のなかで、彼は彼自らが信じる理念に「国民的ユダヤ主義 Nationaljudenthum」(※3)の呼称を与えた。彼は国民的ユダヤ主義を、現状のユダヤ主義に対するユダヤ民族による「自己批判 Selbstkritik」(※4)に位置づける。自己批判としての意味づけからは、19世紀ドイツ語圏において支配的なユダヤ主義に対する抵抗の試みというヘルツルの意図を認めることができる。

プラハでは1899年に、ドイツ系ユダヤ人による民族主義結社「ユダヤ民族協会ツィオン Jüdischer Volksverein „Zion"」が設立されている(※5)。『自衛』は『世界』の創刊から10年後の1907年、「ツィオン」のほか、プラハに複数結成されていたユダヤの民族主義団体を包括する機関誌として設立された。その創刊号では、「われわれはひとつの民族である。ひとつの民族。われわれにないものは故郷である。君たちが望めば、それはメルヘンではない Wir sind ein Volk. Ein Volk. Was uns fehlt, ist die Heimat. Und wenn ihr wollt, ist es kein Märchen.」(※6)という、ヘルツルの『古くて新しい国 *Das Altneuland*』からの宣伝が引用されている。この引用は、『自衛』がヘルツルの方針を基本的に踏襲していることを示している。

この引用の前後からは、「ユダヤのネイション jüdische Nation」、その代表者として「ユダヤのネイションの代表団 jüdischnationale Vertretergruppe」(※7)という用語が見つかる。『自衛』は、ユダヤ人をユダヤの「民族 Volk」であると同時に、ユダヤの「ネイション」としてとらえた(※8)。『自衛』では、帝国を構成する諸民族と対等なユダヤのネイションの理念への賛同者に言及する際、「国民的ユダヤ主義者 die Jüdischnationalen」の名称が用いられていた(※9)。

18世紀啓蒙主義以降、ドイツのユダヤ人は彼らに課された制限を、彼らがドイツ人へと〈同化〉していくことで乗り越えようとした。例えば、ユダヤ教哲学者のヘルマン・コーヘンは「モーゼス・メンデルスゾーンはわれわれにドイツ語を教えた。それによって、われわれにはドイツの公民資格の母になる権利 Mutterrecht für das deutsche Staatsbürgertum 獲得への展望が開かれた」(※10)と述べている。彼は、

3　Die Redaction der „Welt": *Programm.* In: *Die Welt.* 1. Jahrgang, 1897, Nr.1 (4. Juni), S.1.

4　Ebd.

5　Kieval, Hillel J.: *The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia, 1870-1918.* New York (Oxford University Press) 1988, S.96.

6　Niels: *Zur nationalen Emanzipation der österreichischen Juden.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.1 (1. März), S.2f., hier S.2.

7　Ebd.

8　本稿では原則的に、Volk の訳語として「民族」を、Nation の訳語として「国民」を採用している。しかし、Nation の訳語に「ネイション」あるいは「民族」をあてている場合もある。なぜならば、Nation に「国民」の訳語を適用した場合、表記が実情に即していないケースもまた観察されるからである。例えば、二重帝国在住の jüdische Nation に「ユダヤ国民」の訳語をあてたとき、国家としてのイスラエルをもつ前のユダヤ人に国民の訳語がふさわしいかどうか、議論の余地が残されるだろう。『自衛』では、Volk が使われるとき、ユダヤ教徒と人種的な意味が付加されたユダヤ民族とは厳密に区別されることなく、曖昧さが残っている。それに対して、Nation の使用は一義的である。この語が使われるときには、ユダヤ民族は帝国の諸民族と対等な公民としての権利をもつ存在であるという明確な意志の作用が指摘されうる。

9　『自衛』では、ユダヤのネイション主義者を指すのに、より普及している「シオニスト Zionisten」も使われる。しかし、より頻繁に用いられているのは、「ユダヤのネイション主義者 die Jüdischnationalen」のほうである。筆者は、「ユダヤのネイション主義者」に「国民的ユダヤ主義者」の訳語をあてている。

10　Cohen, Hermann: *Der polnische Jude.* In: *Der Jude. Eine Monatsschrift.* 1. Jahrgang, 1916, Heft 3 (Juni), S.149-156, hier S.152.

ドイツ系ユダヤ人がドイツ人と対等な存在になるためには、ドイツ語の習得とその文化への同化が不可欠であると考えた。

コーヘンの取った手段は、ユダヤ教をユダヤ民族に独自の宗教としてとらえる正統主義的なユダヤ教解釈に再検討を加え、それを人類に普遍妥当する教えへと拡張していくことであった。ユダヤ教を倫理の教えとしてとらえようとするリベラルなユダヤ教解釈は、「宗教的リベラリズム religiöser Liberalismus」(※11)、リベラル的ユダヤ主義と言える。この視座は、宗教的帰属の概念と世俗的・国民的帰属の概念をはっきりと区別する。再び、コーヘンの発言を引こう。「ユダヤ人はどこでも、何をおいてもユダヤ人であるのだが、それはユダヤの国民性の概念が存在するからではなく、ユダヤ教への敬虔さによる Der Jude ist überall zuerst Jude, und zwar nicht der jüdischen Nationalität, sondern der jüdischen Religiösität wegen.」(※12)。宗教的リベラリズムの立場からは、ユダヤ人があくまで〈ユダヤ教徒〉としてとらえられている。

宗教的リベラリズムは、土着的要素が残存している東欧のユダヤ教を〈儀礼〉と見なした。それを通じて、リベラル的ユダヤ主義は東欧のユダヤ教に対して、ドイツのそれを優位に置く。リベラル的ユダヤ主義者のもとでは、東欧ユダヤ人が近代文化から隔絶された存在として位置づけられることになる。ブルジョワのユダヤ人のもとでは、イディッシュ語が彼らの〈同化〉以前の、ゲットーの記憶を思い起こさせるものとして、矯正の対象になる。

リベラル的ユダヤ主義に対して、国民的ユダヤ主義は、ユダヤの宗教的帰属と国民的帰属を同義のものと見なす。したがって、国民的ユダヤ主義者のもとでは、ユダヤ教への宗教的帰属と西欧近代文化への世俗的帰属は、両立不能のものと認識される。この両立不可能性への気づきが、国民的ユダヤ主義者のもとでは、「若きユダヤ人によるユダヤ性の再生のための試み jungjüdische Renaissancebestrebung」(※13)として意識されていく。

リベラル的ユダヤ主義者は、ユダヤ教をカトリック、プロテスタントと同等のものとしてとらえた。彼らはドイツ系ユダヤ人を〈ユダヤ教徒のドイツ人〉として、ドイツ民族の構成要素にしようとした。それに対して、国民的ユダヤ主義者は、ドイツ系ユダヤ人をドイツ民族とは異なる「ユダヤのネイション」と見なすことを通じて、彼らを、ドイツ人をはじめとする諸民族と対等な存在にしようとした。

同時に、東欧ユダヤ人に対する両者の態度からも、顕著な差異が観察された。先に述べたように、宗教的リベラリズムはイディッシュ語を、ドイツ語への矯正の対象と見なした。対照的に、国民的ユダヤ主義はそれをユダヤ民族に固有の言語としてとらえ、イディッシュ文学をユダヤ民族の国民文学に位置づける。国民的ユダヤ主義者はイディッシュ文学に、ユダヤのナショナルな文化の創造の可能性を展望した。『自衛』と同時代のプラハで、ドイツ系ユダヤ人を対象に、東欧の事情を仲介した人物がマルティン・ブーバーである。

11　Ebd.

12　Ebd., S. 154.

13　N. N.: *Selbstwehr!* In: *SW.* 1, 1907, Nr.1 (1. März), S. 1f., hier S. 1.

西欧では、部分が次々と剥がれ落ちていく一方で、東欧では、ルネサンスが足場を固め、肯定的な価値を創造しているのです。ユダヤのルネサンスの、その最強度の表現はユダヤ運動 jüdische Bewegung となりました。このユダヤ運動は、時として誤解を招くこともある国民的ユダヤ運動 nationaljüdische Bewegung の名称で呼ばれてきました。国民的ユダヤ運動のねらいは通常の国民運動のそれよりも幅広く、そして深いのです。より幅広く、より深いということは、より根源的で、より悲劇的であるということを意味します。その内容は国民的で、国民としての自由と自立の希求を意味します。(※14)

ブーバーのルネサンスがナショナリズムを志向していることは明らかである。彼はルネサンスという用語のもと、ユダヤの芸術の概念を強調した。一見、彼の運動には政治的な主張がないかのように見える。ブーバーはネイションの権利を正当化するにあたり、そのための根拠を芸術に求めた。

最後に、言語に対する『自衛』の意識を指摘しておきたい。プラハのドイツ系国民的ユダヤ主義者はドイツ語に代わるユダヤの国民語が存在すると主張しつつも、最終的に、ドイツ語からは離れられなかった。『自衛』はドイツ人とドイツ系ユダヤ人の差異を強調しつつも、その廃刊まで、ドイツ語で発行を続けた。

2. ユダヤ人新聞をめぐる現在までの研究状況

『自衛』の記事分析に取りかかる前に、ユダヤ人新聞をめぐる現在の研究状況について簡潔に述べておきたい。2000年代以降、デジタル保存技術が確立されると、ドイツでは、ユダヤ人新聞のデジタルアーカイヴ化事業が進められた(※15)。

ホルヒはユダヤ人新聞の特徴として、ユダヤ系のジャーナリスト、編集者によるユダヤ系の読者向けの媒体であるという点を挙げている。ユダヤ人新聞はユダヤ人にとっての関心が集中する場になる。ユダヤ人新聞からは、ドイツ語圏における少数派としての彼らが抱えていた問題の在処を知ることができるのである。

明白なのは、ユダヤ人新聞においては、一方では順応と同化の問題が、他方では、ユダヤの自己同一性の問題が特別に集中的な議論の対象になりうるということである。この媒体においては、立場

14　Buber, Martin: *Renaissance und Bewegung.* In: *Der Jude und sein Judentum. Gesammelte Aufsätze und Reden / Martin Buber.* Gerlingen (Lambert Schneider) 1993, S. 265-272, hier S. 270.

15　http://sammlungen.ub.uni-frankfurt.de/cm　このアーカイヴの目的は1768年から1938年にかけてドイツ語で出版されていたユダヤ人新聞の網羅的な収集、公開である。『自衛』はこのアーカイヴには収録されていないが、2000年代以降のドイツでは、ハンス＝オットー・ホルヒを中心とするこの事業の関係者により、『自衛』の研究は進められた。Horch, Hans Otto (hg.): *Positionierung und Selbstbehauptung. Debatten über den Ersten Zionistenkongreß, die Ostjudenfrage und den Ersten Weltkrieg in der deutsch-jüdischen Presse.* Tübingen (Max Niemeyer) 2003; Jaeger, Achim: *Nichts jüdisches wird uns fremd sein. Zur Geschichte der Prager Selbstwehr (1907-1938).* In: *Aschkenas. Zeitschrift für Geschichte und Kultur der Juden* 15/2005, H.1. Berlin (de Gruyter) 2005, S. 151-207.

とそれへの反対の立場とが、直接あるいは間接に向かい合っている。(※16)

『自衛』を読んでいくうえで、この指摘は決定的な重要性をもつ。なぜならば、「立場 Position」としての「同化」と、「それへの反対の立場 Gegenposition」としての「国民的ユダヤ主義」の関係は、創刊号冒頭の巻頭論説において真っ先にあらわれてくるからである。

この誇るべき誌名、単なる誌名以上のもの。抗議と綱領。ユダヤ性におけるあらゆる脆さと中途半端さ、腐敗に対する抗議と宣戦布告、そして、ユダヤ民族の若き、自負心に満ちた萌芽力と努力の強力かつ断固とした肯定。(※17)

ここで「脆さ」、「中途半端さ」として表象されているのは、同化主義である。それゆえに、『自衛』による「抗議と宣戦布告」とは、ユダヤ人に敵対的なドイツ、チェコの反ユダヤ主義に向かっているというよりはむしろ、ユダヤ人ブルジョワによるリベラリズムに向かっているということが指摘できる。世紀転換期プラハのユダヤ人のうち、その圧倒的多数は同化主義を支持していた。『自衛』の紙面を分析する前提として、それがユダヤの世論の主流に対する〈対抗〉のための媒体であったという事実を共有しておきたい。

3. オーストリア＝ハンガリー帝国のユダヤ人新聞としての『自衛』の持説

3.1 国民的利益政治

『自衛』の独自性は、オーストリア＝ハンガリー帝国に対する既存のリベラル的ユダヤ主義と国民的ユダヤ主義とのあいだにある差異に注目すると、よりはっきりとする。前世紀転換期のハプスブルク帝国では、チェコ人をはじめとする諸民族によるナショナリズムが擡頭し、従来からのドイツ人による統治に疑義が呈されていた。この状況のもと、同化主義者はドイツのネイションを自認していた。彼らには、ドイツ人、チェコ人に対して、ドイツ民族の一員としてふるまうことが期待されることになる。そのために彼らが取った手段は、ドイツのナショナリズムにとっての前衛の役割を果たすことであった。同化主義者はドイツ文化の尖兵として、チェコ人に対して、ドイツ文化の優位性を主張した。

それに対して、国民的ユダヤ主義者はドイツ文化に優位性を与えない。彼らは、帝国を構成する諸民族は対等の関係にあると認識する。この原則から導き出されるのが、ドイツ系ユダヤ人の同化とドイツ文化の優位性の主張を「一方的な階級政治・人種政治 einseitige Klassen- und Rassenpolitik」(※18)への加担としてとらえるまなざしである。国民的ユダヤ主義者はドイツ系ユダヤ人の同化を階級支配・人種差別への加勢と見なすだけではなく、そこに反ユダヤ主義の原因を見た。

16　Horch: Ebd., S. VIIf.

17　N. N.: *Selbstwehr!* In: *SW.* 1, 1907, Nr.1 (1. März), S. 1f., hier S. 1.

18　Kadisch, Dr. H.: *Klassen-, Rassenpolitik und Antisemitismus.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.25 (16. August), S. 2f., hier S. 2.

旧リベラル、いわゆるマンチェスター派リベラルの政治は、特権階級、資本主義ブルジョワジーの弁護士の役割を果たしていただけではない。リベラルの政治は、民族的な方針 nationale Richtung においても支配の原則の役割を果たしていた。この基本方針の延長線上にあるのが、「優位なドイツの人種と劣等な非ドイツの諸民族 die superiore deutsche Rasse und die inferioren nichtdeutschen Nationalitäten」という主張である。(※19)

国民的ユダヤ主義者が〈同化〉を不正な他民族支配への加担であると非難する背後には、ボヘミア王国領に在住するユダヤ人の状況が関係している。実際、前世紀転換期のこの地域では、チェコ系ユダヤ人の数がドイツ系を上回っているという状況があった。ベンヤミン・ゼフのペンネームで『世界』に掲載された記事「ボヘミアにおける狩り」(※20)では、ボヘミア在住ユダヤ人のもとでのドイツ語の趨勢が報じられている。そこでは、説教言語にもとづくユダヤ教徒の信徒団 Gemeinden 統計が、チェコ語のみの信徒団、チェコ語の優勢な信徒団、ドイツ語の優勢な信徒団、ドイツ語のみの信徒団という順位で挙げられていた(※21)。この数値からは、ボヘミア在住のユダヤ人のあいだでドイツ語は共通語としての地位を失いつつあるという著者によるメッセージを受け取らなければならない。

ドイツ系ユダヤ人による同化は、ドイツ人によるチェコ人支配を強化することであった。それはチェコ人にとっての敵の尖兵の役割を演じることでもある。チェコ人への同化を通じてチェコ系ユダヤ人がチェコ人に貢献したことは否定できない。それにもかかわらず、ドイツ系ユダヤ人による同化のために、チェコ系ユダヤ人によるチェコ文化への貢献は評価されないままで終わってしまう。それどころか、ドイツ系ユダヤ人はドイツのナショナリズムの前衛として、チェコ人からは民族の迫害者と見なされている。国民的ユダヤ主義者はドイツ系ユダヤ人の同化に、ドイツ人とチェコ人からの二重の疎外の原因を見た。

この閉塞状況に対処するにあたり、ゼフからは、ユダヤ人がドイツ人、チェコ人と対等な「ネイション」であるという自覚をもつことの重要性が述べられる。ユダヤ民族はネイションとして、諸民族に依存しないユダヤの国民的利益のみを追求するべきなのである。『自衛』のサブタイトルとして採用されている「独立的 unabhängig」からは、諸民族に依存することなく、ユダヤ民族の利益のみを追求するべきであるという国民的ユダヤ主義の意図が推測できる。

〈同化〉へのオルターナティヴとして国民的ユダヤ主義者が展望したことは、ユダヤ人を帝国のそのほかの諸民族と対等な存在にすることであった。そのための手段として『自衛』が喚起するのは、チェコ人の例に倣ったユダヤ人による「国民的利益政治 nationale Interessenpolitik」(※22)の実践である。

19　Ebd.

20　Seff, Benjamin: *Die Jagd in Böhmen.* In: *Die Welt.* 1, 1897, Nr.23 (5. November), S. 1f.

21　Ebd., S.2.　ゼフは「チェコ語のみの信徒団3576、ユダヤ人15597／チェコ語・ドイツ語の信徒団1510、ユダヤ人55899／ドイツ語・チェコ語の信徒団976、ユダヤ人19782／ドイツ語のみの信徒団1148、ユダヤ人3201」という数値を引用している。

22　Niels: *Die Proletarisierung der jüdischen Intelligenz in Oesterreich.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.7 (12. April), S. 2f., hier S. 2.

国民的利益政治の名のもとに、ボヘミア諸邦自治機関または地方自治機関 autonome Landes- und Gemeindebehörden のありとあらゆる公職から徹底した情け容赦のないユダヤ人の追放が実施されている。この政治的意図は明白である。これは国の諸邦官庁または地方官庁の雇用 staatliche Landes- und Gemeindestellen のうち、できるだけ多数を自分の民族 eigene Nation に属する人々によって占めてしまおうという試みである。こうして、政治的拡張に必要な民族的前線あるいは民族的防御線 nationale Offensive oder Defensive の新しい拠点が設けられていく。そもそもこの試みに際しては、その正当性にも、その目的合理性にも、疑義が呈されていない。とりわけチェコ人がこの国民的利益政治の領域で多大な成功を収めた。ところが、ユダヤ人自らも、オーストリアにおけるこのような民族政治的、文化的競争 dieser nationalpolitische und kulturelle Wettbewerb in Österreich に参加することができるのではないか、そして参加するべきなのではないかという、そもそも否定されようのない問いについては、未解決のままなのである。(※23)

国民的利益政治は「近代のユダヤ的民族政治 moderne jüdische Volkspolitik」(※24)へと言い換えられていく。「ユダヤ的民族政治」からは、オーストリア＝ハンガリー帝国への『自衛』の姿勢を引き出すことができる。君主国のユダヤ人新聞としての『自衛』の特徴は、帝国への一貫した支持の姿勢にあった。『自衛』での、ユダヤのネイションにとっての利益は帝国にとっての利益に合致するという姿勢に揺らぎが見えることはない。それでは、『自衛』は、ユダヤのネイションの利益とその国家の利益をどのようにして一致させようとしたのだろうか。

3.2 国民連邦制

『自衛』がヘルツルのシオニズムを模範にしつつ、それから一線を画している理由は、『自衛』が彼のそれよりも、より現実的であるという理由にある。ヘルツルは「ユダヤ人国家 Judenstaat」を目標に置いたが、『自衛』では、ユダヤ人による単独の国家は想定されていない。『自衛』は読者にあてて、彼らが住むべき場所は「多民族帝国 Völkerreich」(※25)のオーストリアであるとはっきり述べている。

事実、ユダヤ人にとっての生の利益は帝国の利益と一致している。保護されることが必要な、ユダヤ人のような少数民族 Minderheit は、ベルリンにも、モスクワにも、そしてローマにも引き寄せられることはない。ユダヤ人が独自の、ユダヤのネイションの個性の維持を求めるのであれば、その追求の可能性は、統一されてはいるものの、国民自治的な意味では、再編のなされた多民族帝国オーストリアのなかにしかない。未来は国民自治のオーストリアにある。これはライタ川 die Leitha で中断されてしまってはならない。(※26)

---

23 Ebd.

24 Kadisch, Dr. H.: *Die Juden und das neue österreichische Parlament.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.21 (19. Juli), S. 1f., hier S. 1.
Kadisch, Dr. H.: *Die ungarische Frage und die Juden.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.18 (28. Juni), S. 3.

26 Ebd.

カディッシュのペンネームの投稿者は、二重帝国制に代わる体制として「国民自治 nationale Autonomie」を挙げている。国民自治は、リヒャルト・ハルマッツの着想(※27)から採られたものである。

『自衛』の記事「旧リベラル主義者、新リベラル主義者、若きユダヤ人」(※28)では、ハルマッツによる「国民連邦制 nationalföderativ」(※29)の構想が紹介されると同時に、その問題もまた指摘されている。「旧リベラル主義者」に該当するのは、ドイツ民族に分類されるユダヤ教徒として、ドイツ系ユダヤ人の利益を守ろうとする同化主義者である。「新リベラル主義者」は、二重帝国制から国民連邦制への再編を主張しているハルマッツらに該当する。問題は、ハルマッツがユダヤ民族をネイションとは見なしていない点にある。新リベラル主義者は、ユダヤ民族はドイツ、チェコをはじめとする諸民族に含まれるべきだという態度を取った。国民的ユダヤ主義者、すなわち、「若きユダヤ人」は、ハルマッツの国民自治の構想に賛同しつつ、ユダヤ民族は帝国の諸民族と対等なネイションとして、国民連邦制に加盟するべきだと主張する。

カディッシュは二重帝国制の弊害として、ライタ川を境界とする「ライタ以西とライタ以東 Zis- und Transleithanien」の分断を挙げている。帝国の諸民族は、ライタ川にまたがって、オーストリア側とハンガリー王国領側の双方にまだら状に居住している。カディッシュは、オーストリア諸邦とハンガリー王国の分離を、諸民族によるドイツ人、または、マジャール人への同化を後押しする要因と見なした。二重帝国制から国民連邦制への移行は、諸民族によるドイツ人とマジャール人への同化・収束を防ぐ。諸民族は対等な権利を分け合うことを通じて、各民族の繁栄を謳歌する。ハプスブルク皇帝は、オーストリアとハンガリーという従来の権力に代わって、国民連邦の象徴となる。

民族対立下の状況におけるユダヤ人の同化は結果的に、闘争し合う民族のうち、ユダヤ人の生活にとって便利な、優位にある民族に加勢することに通じてしまった。ドイツ系ユダヤ人、マジャール系ユダヤ人による同化はチェコ人、セルビア・クロアチア人に対する敵の役割を演じることになる。その結果、ユダヤ人はドイツ人ほかから疎外されるだけでなく、チェコ人ほかからも疎外されてしまう。二重帝国制への同化は、二重の疎外を招くことになるため、ユダヤ人の生存にとって適切ではない。『自衛』からは、多民族国家におけるユダヤ民族の存続にとっては、諸民族と対等なネイションとして国民連邦に参加するのが最善の道であるという結論が出されている。

オーストリア＝ハンガリー帝国のユダヤ人新聞としての『自衛』の特徴的な姿勢は、多民族国家機構とユダヤ民族を相互依存の関係に置いていることに見出された。オーストリアのユダヤ民族に国民連邦を形成するネイションの権利が与えられることは、反ユダヤ主義に対する「自衛」の策になる。では、ユダヤ民族に対する国民的権利の保障への贖いとして、『自衛』は多民族国家にどのように貢献しようとしたのだろうか。

27　Charmatz, Richard: *Deutsch-österreichische Politik. Studien über den Liberalismus und über die auswärtige Politik Österreichs.* Leipzig (Verlag von Duncker & Humblot) 1907.

28　Kadisch, Dr. H.: *Altliberale, Neuliberale und Jungjuden.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.27 (30. August), S. 2.

29　Ebd.

3.3 民族対立の調停者

『自衛』では一貫して、ユダヤ民族とハプスブルク帝国とは相互依存の関係にあると論じられていた。ユダヤのネイションに対する帝国による庇護の贖いに『自衛』が提供しようとするのは、民族対立の調停である。いささか理想主義的に聞こえるが、『自衛』では、帝国による庇護への返礼として、ユダヤ民族による「諸民族の親睦 Völkerverbrüderung」(※30)への貢献が挙げられている。

> ユダヤ民族が求めるのは唯一、公民としての同権 Gleichberechtigung als Staatsbürger、とりわけ、多民族連邦州 Nationalitätenstaaten における国民として als Nation のそれである。ユダヤ民族はそのほかのあらゆる諸国民の権利を承認する。この権利は、いかなることによっても制約されることのない、自由な文化的発展の可能性を約束するものである。若きユダヤ人による多民族政治 Nationalitätenpolitik der Jungjuden はその基礎をユダヤ的倫理 jüdische Ethik に置いている。ユダヤ的倫理は、人間的な発展の最終目標を諸民族の親睦に見出している。(※31)

第一次世界大戦に際して、ドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国、オスマン帝国による同盟が成立すると、パレスチナにおける土地確保への野心から、『自衛』は戦争賛成の立場を取った。オーストリア帝国軍へのユダヤ人兵士の入隊を募るにあたり、『自衛』が戦争協力への根拠として挙げるのは、ユダヤ民族とオーストリアが共有している「仲介者」の使命である。オーストリアには西欧の文化を中近東に移植し、その地の文化的展開をうながす義務がある。そのユダヤのネイションは中近東に故郷をもつ民族として、オーストリアの東方侵攻にとっての前線部隊の役割を果たすことができる。同盟国の勝利に貢献したのち、オーストリアのユダヤ人はヨーロッパでのユダヤ民族による国民自治の経験を糧に、パレスチナにおいて彼らの自治を実現させる。『自衛』は、オーストリアの東方侵攻にユダヤ民族にとっての国民的利益とオーストリアにとっての利益の一致を見た。

国外の東方問題の解消のために見出された「仲介者」の使命は、民族対立の調停者の使命として、国内問題の解消のためにも適用されている。『自衛』が民族対立をどう調停しようとしたのかという問いには、記事『オーストリアの公民、ユダヤの国民』(※32)が答えを与えてくれる。このタイトルが示唆するのは、公民としての同一性と、民族としての同一性は同じである必要はない、あるいはむしろ、同じであってはならないという視座である。ユダヤ民族に倣い、ドイツ、チェコをはじめとする諸民族が、オーストリア公民としての同一性と各ネイションとしての同一性を両立させるとき、諸民族の宥和が実現する。

30　Kadisch, Dr. H. (Wien) : *Die Juden und das neue Europa.* In: *SW.* 10, 1916, Nr.1 (7. Jänner), S. 3f., hier S. 3.

31　Ebd.

32　Kadisch, Dr. H. (Karlsbad) : *Cives austriaci, natione judaei.* In: *SW.* 10, 1916, Nr.17 (5. Mai), S. 1.　脚注18、24、25、28、30として引用した記事には、H. カディッシュ博士 Kadisch, Dr. H. の署名がある。1916年の記事である脚注30の H. カディッシュ博士には、ウィーンの地名が追記されていた。『オーストリアの公民、ユダヤの国民』の H. カディッシュ博士にはカールスバートの地名がある。H. カディッシュ博士のペンネームは、複数の投稿者によって使われていたということが指摘できる。

とりわけユダヤ民族は帝国の各地域に分散して居住している。彼らはボヘミア、ガリツィアをはじめとする各地で、民族対立の仲介者の役割を果たす。その役割は、『自衛』がドイツ系ユダヤ人による〈同化〉をチェコ人に対する人種支配として糾弾していたように、他民族に対する不正な支配を告発することである。

> 少数派としてのわれわれには、国民的な凌辱 nationale Vergewaltigung がおこなわれた場合、国内のありとあらゆる少数民族 jede nationale Minderheit の権利を守るために立ち上がる義務がある。彼らが君主国のどこに居住する民族であろうが、われわれにその義務があること自体に変わりはない。なぜならば、その理由は第一に、オーストリアの使命 Mission Oesterreichs に合致するものであるし、第二に、われわれ自身のユダヤの国民的利益 unsere eigenen jüdischen Nationalinteressen に合致しているからである。(※33)

『自衛』では、公民の帰属とネイションの帰属の両立がオーストリア公民の同一性を基礎づけると考えらえていた。繰り返すが、ヘルツルのシオニズムがユダヤ人国家の建設に向かっているのに対して、『自衛』では、ユダヤ民族による単独の国家建設は話題にされていない。そこでは、ユダヤ民族はそのほかの諸民族と対等なオーストリアの公民であるという視座が示されていた。

4.　『洗礼を受けた女』

これまでに述べてきた通り、国民的ユダヤ主義はユダヤの同一性をめぐる議論に、ユダヤ教への敬虔さによってだけでなく、ユダヤのナショナリティによって決定づけられるという新たな視座をもち込んだ。この視座はリベラル的ユダヤ主義者・同化主義者から激しい批判を受けることになる。『自衛』は、同化主義者から寄せられる国民的ユダヤ主義批判に対する再反論のための媒体であった。ユダヤのナショナリティは〈真実〉として存在するという認識は、ドイツ系ユダヤ人の世論に、ユダヤ人がユダヤ人を誹謗中傷するだけでなく、迫害するという現実をつくり出していた。この現実は無意識のうちに新聞小説のなかにも取り込まれている。

『自衛』では毎号、「文芸欄 Feuilleton」が設けられている。ここでは文芸評論をはじめ、読切小説、旅行記などが掲載されていた。カフカの『律法の門前』(※34)を主流派メディアに先駆けて掲載したのも、『自衛』の文芸欄である。ユダヤの同一性をめぐる議論を精緻化させていく過程において、文芸欄は大きな役割を果たしていたと考えられる。文芸欄に掲載された文学の役割を検討するため、本稿では『洗礼を受けた女』(※35)という一話完結の散文作品を取り上げる。この作品は、ロシアに生まれ、アメリカ

33　Ebd.

34　Kafka, Franz: *Vor dem Gesetz.* In: *SW.* 9, 1915, Nr.34 (7. September), S. 2f.

35　Aus dem Jüdischen von J. Wendrowski: *Die Getaufte.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.13 (24. Mai), S. 1ff. このタイトル記載にしたがうと、『洗礼を受けた女』はイディッシュ語テクストからの翻訳であり、その原作者は不詳ということになる。他方、ヴェンドロフスキなる人物が翻訳者を装っているにすぎず、実は作者そのひとである可能性もあり、その場合はイディッシュ語テクストの存在自体が疑わしくなる。

に移住した老婆が自らの半生を一人称で語るという体裁を取っている。

主人公のアンナは1835年頃、エカテリノスラフ近郊の寒村に生まれた。幼くして孤児となった彼女は、正教徒の農民夫妻の養女として育てられる。17歳のとき、彼女はロシア帝国軍に所属する中隊長に見染められ、その妻となった。彼との結婚の際、アンナは洗礼を受けた。彼女は故郷の村の教会での洗礼式のことを次のように述懐している。

> 私はまるで、死んだはずの両親が眼の前に漂っているかのような心地がしました。両親の口からは洗礼式のあいだじゅう、こんな言葉が発せられていました。「忌まわしい娘だ、お前はここで何をしている」。そんな具合にして、私は中隊長アレクセーエフの妻になったのです。(※36)

その後のアンナは息子を授かり、母となる。クリミア戦争が始まると、中隊長はセバストポリに徴兵された。夫の出征の隙を突き、彼女は3歳になる息子を置き去りにして、都会のエカテリノスラフに逃れた。そこで彼女はユダヤ人の富豪ローゼンシュタイン家の奉公人を経て、その家の後妻となる。富豪の後妻として息を潜めて暮らしている際、中隊長が出奔した妻の行方を捜しているという噂を聞くと、恐怖に駆られた彼女はアメリカに逃亡する。それから25年を経ても、息子を置き去りにしてきたことに対する彼女の後悔が癒されることはなかった。彼女の悔恨から息子の幻影がつくられる。幻影のなかのロシアの息子は亡命した母親の代わりに、ロシアのユダヤ人に子供遺棄の罪を問う。子供遺棄への制裁は、ユダヤ民族に対する迫害として実践されている。

> 私はユダヤ人の敵を野に放ってきたのではないだろうか。こんな考えから私は離れることができません。ロシアでのユダヤ人迫害について耳にするとき、そして、ロシアでのユダヤ人虐殺について読むとき、私の年老いた手の震えは止まらなくなります。足も動かなくなります。
> そんなとき、私はいつも、私の実の子が私の眼の前にいるのではないかと思います。その子は暴徒の先頭に立ち、群衆を率いてユダヤ人街に突入していく。私には、成長したあの子が「奴ら、ユダヤ人を打ちのめせ！ユダヤ人を殺せ！」と、群衆を煽り、そそのかしているのが聞こえてきます。こんな想像のせいで、私の心に平安が訪れることはありません。あの子を捨ててからというもの、あの子は私の視界から一度も消えてくれないのです。あの子はきっと、墓場にまで私についてくることでしょう…。でも、それも、そんなに遠い先のことではありません。(※37)

洗礼を受けたアンナは統計上、正教徒として処理されるだろう。彼女の改宗手続きをどう見なすかにもよるが、彼女の息子はれっきとしたユダヤ人である。なぜならば、ユダヤ教では、ユダヤ人の母から生まれた子供はユダヤ人であると規定されているからである。『洗礼を受けた女』からは、ユダヤ人の息子が同胞のユダヤ人を迫害しているという構図が見えてくる。ユダヤ人によるユダヤ人に対する批判

36　Ebd., S. 2.
37　Ebd., S. 3.

という国民的ユダヤ主義をめぐる情勢は、ハスモンの一族の再評価を意図する『自衛』の試みを通じて、再検証されることになる。

5. ユダヤ民族の同一性をめぐる論争

伝統的にユダヤ教では、流謫は神の摂理としてとらえられる。それゆえに、ユダヤ人の義務は流謫をできるだけ引き延ばすことであると教えられてきた。ユダヤ教では、流謫に終止符を打つことができるのは唯一、神のみであるという見解が強調される。18 世紀啓蒙主義以降の宗教的リベラリズムは西欧近代文化への同化を主張したが、ユダヤ教のディアスポラ主義を引き継いでいる。先に述べた通り、同化主義者は宗教的な帰属の概念と世俗的・国民的な帰属の概念を明確に区別し、ユダヤ民族はユダヤ教への敬虔さによってしか決定づけられないという態度を取った。

それに対して国民的ユダヤ主義者は、宗教的な帰属と国民的な帰属を同義にとらえる。ドイツ系ユダヤ人とドイツ人を人種的に異なる存在であるととらえる彼らによれば、〈同化〉とは、偽りの自分を演じることにほかならない。その結果、国民的ユダヤ主義者は反ユダヤ主義を、ユダヤ人の自己欺瞞に対する懲罰と解釈する。

『自衛』は好んで自らを「マカバイの一族」にたとえる。「マカバイ」は第二神殿時代、ギリシャ人とシリア人を相手に一神教を守り通したユダヤ民族の独立闘士である。しかし、マカバイをめぐる逸話『キスレヴ月の 25 日に』(※38)を読むと、ユダヤ人にとっての敵はギリシャ人・シリア人ではなく、ヘレニズム文化への同化を主張したユダヤ人であるということが分かる。国民的ユダヤ主義者はヘレニズム文化をユダヤ人にとっての「仮象の所有物 Scheinbesitz」(※39)と論じた。先進的な文化の吸収をユダヤ人にとって偽物の習得として認識しようとする国民的ユダヤ主義者のまなざしからは、ヨーロッパ文化への同化が自己欺瞞としてとらえられていることが読み取れる。

> マタティアの時代、その民に対してギリシャ主義者が犯した忌まわしき罪は、どれほどのものであったことか。歴史はそれをはっきりと物語っている。堕落した貴族どもは、彼らに受け継がれた古きよき遺産、すなわち、彼らの民族性 Volkstum を否定した場合にのみ、ギリシャ・ヨーロッパの知的教養という仮象の所有物を意のままにすることができると考えた。(※40)

ギリシャ人との闘争で窮地に陥った「シオンの闘士 Zionstreiter」(※41)は、同胞のギリシャ主義者に援助を求める。しかし、ギリシャ主義者は一神教さえ守られればよいという理由を挙げて、闘争への援助

38　E., Dr. A.: *Zum 25. Kislew.* In: *SW.* 1, 1907, Nr.40 (29. November), S. 1f.

39　Ebd., S. 1.

40　Ebd.「ギリシャ主義者」の原語は「ギリシャ人・ギリシャ者 Griechlinge」である。しかし、『キスレヴ月の 25 日に』での「ギリシャ人」は、ギリシャ出身者ではなく、ヘレニズム文化への同化主義者の意味で用いられている。そのため、筆者は「ギリシャ人 Griechlinge」に「ギリシャ主義者」の訳語をあてた。

41　Ebd.

を拒否した。「敬虔なる者たち die Frommen」(※42)はギリシャ主義者につき従い、イェルサレムは見捨てられてしまう。

> 二度にわたってイェルサレムを見捨てることになる彼ら［ハシッド Chaßidäer たち］は、表情を変えることも、一言も発することもないまま、ギリシャ主義者の裏切り者のかたわらを通り過ぎていく。彼らのなかからも、ギリシャ主義者によく通じる者が現われてくる。彼らの顔には5年前のような、絶望のまなざしが浮かぶことはもはやない。彼らはイェルサレムを引き払う者から背信の徒にいたるまで、シオンの闘士の挫折をほくそ笑み、あざけった。(※43)

『キスレヴ月の25日に』では、「シオンの闘士」と「ギリシャ主義者」が両極にあり、「敬虔なる者」・「ハシッドたち」がギリシャ主義に追従する存在として描かれていた。この三者の関係は、『自衛』をめぐる環境に一致する。その場合、「シオンの闘士」が国民的ユダヤ主義者に、「ギリシャ主義者」が同化主義者に、そして「ハシッドたち」は、同化主義に追従するドイツ系ユダヤ人に該当する。

『自衛』では、一神教さえ守られればそれでよいという態度では、それすらも失われてしまうという警告がなされる。国民的ユダヤ主義者は、同化主義に追従するユダヤ人にあてて、次のような非難の言葉を発する。

> 兄弟よ、君たちは日常の人間性 Alltagsmenschentum という狭量さの虜囚になってしまった。それゆえに、君たちには、ロシアやルーマニアで死の不安にさいなまれている民同胞の絶望の叫び、渇望の叫びが聞こえていない。それだけでなく、君たちには、民族から離れていくという不名誉の、底なしの奈落が見えていない。君たちは危機の時代に、君たちの先祖伝来のネイションに背を向けることを通じて、奈落の底に呑み込まれようとしている。(※44)

ユダヤの同一性が信仰によってしか決定づけられない概念なのか、それとも、それと同時に人種的な概念でもあるのかというユダヤ人の再定義をめぐる論争は、ドイツ系ユダヤ人のあいだに、ユダヤ人がユダヤ人を相互に批判し合うという状況をつくり出していた。同化主義者と国民的ユダヤ主義者による論争は、その議論のさらなる深化をうながすことになった。ユダヤ民族をユダヤ教徒からユダヤのネイションへと再定義しようとする過程では、ユダヤの言語、文化、芸術の概念に注意が向けられた。この視線は文化的ナショナリズムとして、ドイツ系ユダヤ人によるユダヤの国民文学の創造の可能性を喚起していった。

*

前世紀転換期のプラハでは、ユダヤ人の同一性を決定づける際、宗教上の帰属の概念とナショナルな

42　Ebd.「敬虔なる者たち」は、ヘブライ語由来の「ハシッドたち Chaßidäer」とも言い換えられている。
43　Ebd., S. 2.
44　Ebd.

帰属の概念は明確に区別されていた。ユダヤ人をめぐるこの一般的な理解に対して、『自衛』は、ユダヤ人はユダヤ教徒であるだけでなく、ネイションであるというテーゼを、ドイツ系ユダヤ人の世論に仲介した。この新聞では、ユダヤのネイションにとっての利益の追求がオーストリア＝ハンガリー帝国にとっての利益に通じるという視座が提示されていた。その過程で『自衛』が注目したのは、諸民族間の「仲介者」としてのユダヤ民族の歴史的使命であった。この使命は民族対立の仲介者・異言語間の翻訳者として、プラハのドイツ語作家の創作意識のなかにも取り込まれている。

ドイツ系ユダヤ人の世論とユダヤ系ドイツ作家との交差地点を指摘することは、ドイツ語作家の問題意識に近づいていくためのアプローチのひとつになりうるのではないだろうか。〈プラハのドイツ語文学〉を再考するにあたって筆者が主張したいのは、ドイツ文学史に対して少数民族による対抗的媒体が果たしたその歴史上の意義に注目することである。『自衛』に記事を、あるいは、その文芸欄に読切創作を投稿した人々は、カフカやマックス・ブロートのほか、圧倒的に名もなきユダヤ人であった。その無数の、署名もない記事に眼を通すと、世論としてのドイツ系ユダヤ人の集合的意識と個別作家の創作意識をつなぐ接点が見えてくる。『自衛』からは、ドイツ系ユダヤ人の世論とその作家の使命意識とが重なる場所として、「仲介者」の理想を挙げることができた。

参考文献

一次文献

Congressional Information Serv. German-Jewish Periodicals B350 — Selbstwehr. Unabhängige jüdische Wochenschrift. 1907-1938.（マイクロフィルム、北海道大学文学研究科・文学部図書室所蔵）

Die Welt. 1897-1914. (http://sammlungen.ub.uni-frankfurt.de/cm)

二次文献

Binder, Hartmut: *Franz Kafka and the Weekly Paper "Selbstwehr."* In: *Leo Baeck Institute Yearbook.* New York (Leo Baeck Institute) 1967, S. 134-148.

Cohen, Hermann: *Der polnische Jude.* In: *Der Jude.* Eine Monatsschrift. 1.Jahrgang, 1916, Heft 3 (Juni), S. 149-156. (http://sammlungen.ub.uni-frankfurt.de/cm)

Horch, Hans Otto (hg.): *Positionierung und Selbstbehauptung. Debatten über den Ersten Zionistenkongreß, die >Ostjudenfrage< und den Ersten Weltkrieg in der deutsch-jüdischen Presse.* Tübingen (Niemeyer) 2003.

Jaeger, Achim: *Nichts Jüdisches wird uns fremd sein. Zur Geschichte der Prager Selbstwehr (1907-1938).* In: *Aschkenas. Zeitschrift für Geschichte und Kultur der Juden.* 15/2005, H. 1. Berlin (de Gruyter) 2005, S.151-207.

Kieval, Hillel J.: *The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia. 1870-1918.* New York (Oxford University Press) 1988.

Spector, Scott: *Die Konstruktion einer jüdischen Nationalität. Die Prager Wochenschrift „Selbstwehr".* In: *Brücken. Germanistisches Jahrbuch Tschechien - Slowakei.* Neue Folge 1. Berlin, Prag, Prešow (brücken-Verlag) 1991/1992, S. 37-44.

Spector, Scott: *Prague Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle.* Berkeley and Los Angeles, California (University of California Press) 2000.

Stölzl, Christoph: *Kafkas böses Böhmen. Zur Sozialgeschichte eines Prager Juden.* München (Text u. Kritik) 1975.

Tramer, Hans: *Die Dreivölkerstadt Prag.* In: *Robert Weltsch zum siebzigsten Geburtstag.* Tel Aviv (Biaton) 1961, S.138-203.

アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（加藤節監訳）、岩波書店、2000年。

シュロモー・サンド『ユダヤ人の起源　歴史はどのように創作されたのか』（高橋武智監訳）、浩気社、2010年。

ヤコヴ・ラブキン『トーラーの名において　シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』（菅野賢治訳）、平凡社、2010年。

第 3 章

カフカに見る「チェコ」文学との交点 —— ニェムツォヴァーとランゲルを介して

阿部 賢一

0. はじめに —— テクストの下層に潜む「読書」体験

20 世紀初頭のプラハにおける複数言語の使用をめぐっては、ドイツ系住民とチェコ系住民の分離された世界を強調する言説がある一方、その実態は十分に検証されていない。とりわけ、文学研究においても特定の単一言語に依拠する形での分析が大勢を占めていた。だが、フランツ・カフカが保険局の業務をチェコ語でこなし、義弟にチェコ語で絵葉書を綴るなど、チェコ語の運用能力が一定程度あったことは知られており、近年のマレク・ネクラの研究によってその様相はより具体的なものとして提示されている(※1)。つまり、ドイツ語で執筆したカフカの言語能力には、ドイツ語だけではなく、チェコ語など、複数言語の源泉が介在していたことは明らかになっている。ここで着目するのはカフカの「読書」体験である。「読書」体験を契機として複数言語の関係性を検証することは、多言語空間である「プラハ／ボヘミア」の文学記述について検討することでもある。本稿では、具体的にカフカと 19 世紀のチェコ語作家ボジェナ・ニェムツォヴァー、そして、カフカと同世代のヘブライ語詩人イジー・ランゲルという補助線を描くことによって、「プラハ／ボヘミア文学」を論じる可能性をも視野に入れたい。

1. ニェムツォヴァーを読むカフカ

カフカの「日記」「書簡」のなかでおそらくもっとも多く言及されているチェコ語の作家は、ボジェナ・ニェムツォヴァー（1820-1862）であろう。19 世紀のチェコ文学を代表する小説家として、ニェムツォヴァーについては、詩人であり民話収集家のカレル・ヤロミール・エルベン（1811-1870）や詩人ヴァーツラフ・ボレミール・ネベスキー（1818-1882）ら、いわゆる民族復興に関係する文人との関連が強調されて語られることが多い。また、農村の市井の人びとの生活を描いたニェムツォヴァーは「チェコ文学」という「国民文学」の枠組みにおいてはチェコの民衆世界を代表する作家として位置付けられ、20 世紀後半の「社会主義リアリズム」文学史観においてはプロレタリアートの代弁者という位置づけがなされるなど、時代に応じた解釈がなされてきた。だが、ここで試みたいのは、言語的なカテゴリーに依拠する「チェコ語文学」の枠組みとの関係性ではなく、空間としての「ボヘミア文学」における作家間の

1　Marek Nekula: *Franz Kafkas Sprachen „…in einem Stockwerk des innern babylonischen Turmes…“*. Tübingen: Niemeyer 2003.

相互影響の可能性の探求である。

カフカがミレナ・イェセンスカーに宛てた手紙のなかで、「チェコ語では（わずかしか知らないのですが）私はただひとつの言葉の音楽 eine Sprachmusik、すなわち、ボジェナ・ニェムツォヴァーのそれしか知りませんが、あなたのはまた一種別の音楽です」(※2)とニェムツォヴァーの名前を挙げたことはよく知られている。農村を舞台にするニェムツォヴァーのリアリズム的作品とカフカ作品の親縁性は一見するとあまりないように思われるが、マックス・ブロートも指摘しているように、両者の作品にはすくなからず共通点が見受けられる。

まず、ニェムツォヴァーの中篇小説『城館とふもとの村 *V zámku a v podzámčí*』(1856) とカフカの『城 *Das Schloss*』におけるモティーフの共通性がある。名称（『城』のチェコ語訳のタイトルは „Zámek“ であり、ニェムツォヴァーの作品名と呼応している）のみならず、「城」・「城下町」あるいは「村」という空間的な対立関係においても、両作品は共通点を有している。ニェムツォヴァーの作品で対比をなすのは、城館に暮らす裕福な貴族の豪勢な暮らしとふもとの町に住む庶民のつましい生活である。城館では飼い犬ヨリの食事にまで存分の経費が注ぎ込まれる一方、ふもとの村では日々の食べ物にすら困窮していた。そのような折、幼い弟がチフスに罹り、すっかり生気を失っている様子を目にした少年ヴォイチェフは、城館の人びとに助けを求める決心をする。

> 「かあさん、ぼくは城館 Zámek に出かけていって、お願いしてくるよ、ヨジーフェクに牛乳をすこし分け与えてくれるようにって、ちょっとここで待っていて」ヴォイチェフは立ちあがると、すぐに行動に移そうとした。
>
> 「だめ、ヴォイチェフ、城館に行ってはだめ、いい、あそこに行ったら、いろんなところから大声で怒鳴られるわよ――あそこに行くんじゃない、殴られるかもしれないよ」
>
> 「ぼくを追い出した召使は、犬を連れていてね、その犬はひどくぼくに吠えたんだ。――でも、ドロトカばあさんは厨房に行けばいいって、料理人はいい人だから、物乞いが来たときなんか、年寄りの門番のばあさんか誰かが小銭を渡してくれるって。――だから心配しないで、かあさん、召使に見つからないよう気をつけるから」(※3)

城下町の少年ヴォイチェフが城館から逃げ出した犬を発見することで城館の人びととの交流が始まる。そして自身も病気にかかるなど、城下町の人びとの状況を体験した公爵夫人がふもとの町に暮らす人びとにも暖かい手を差し出すところで物語は終わる。リアリズム的な記述によって進行する本作は、貧困の解消を訴えるニェムツォヴァーの理想を描いたものとして、従来、解釈がなされてきた。だが仔細に小説を読むと、同作がけっしてハッピーエンドとして終わっていないことに気づく。城館とふもとの世界の歩み寄りが示唆されるものの、その先は明示されていないからである。「エピローグ」には、以下のような読者と作家の対話が付されている。

2　『カフカ全集第8巻／ミレナへの手紙』(辻瑆訳)、新潮社、1992年、20-21ページ。[Franz Kafka: *Briefe an Milena.* Erweiterte und neu geordnete Ausgabe. Hrsg. von Jürgen Born und Michael Müller. Frankfurt a. Main: Fischer 1997, S. 22.]

3　Božena Němcová: V zámku a v podzámčí, in: *Povídky*. Praha: Nakladatelství Lidové noviny, 2002, s. 246.

読者：「どういうことなんです――このお話に終わりがないのは？」
作家：「申し訳ありません、私がそうしたのではなく、他の者がそう書いたのです。私はただ書き写しただけなのです。というのも、まだ終わっていないんです。ただ私は星読みの占い師ではありませんので、予言するようなことはできません――それ以上言えないのです」(※4)

このようにニェムツォヴァーの『城館とふもとの村』は、上と下の世界の融合という理想化された結末ではなく、先行き不透明な、ある種の居心地の悪さを残している。この点は、代表作『おばあさん』にも見られる。同作は、庶民的なおばあさんと公爵夫人の友好な関係が全般的に強調されているように思えるが、近寄りがたい城（館）の異様さも強調されている箇所がある。

「一体どうしたらいいの？　相手がただのほら吹きなら、そのうち何とかできるかもしれないけれど、館の（ze zámku）管理人さんや書記は厄介なお客さんで、わたしは始末に困っているのよ。あのいやらしい年寄りがどんなにわたしにつきまとっているか、話すのも恥ずかしいわ。管理人さんは何が何でもミーラをどこかへ追っ払いたいと思っているのだ、と誰かがわたしに囁いているような気がするけれど、そうかもしれないわ」(※5)

そして『おばあさん』において特徴的であるのは、男性の不在である（唯一、長い語りを披露するのは「粉屋」であるが、彼が語るのは気がふれたヴィクトルカの物語であり、作中唯一の暗部となっている）。おばあさんは公爵夫人の招きで城館を訪れるも、城館の主たる公爵はウィーンなどのほかの都市に滞在しているため、姿を見せることはない。つまり、カフカの『城』に呼応するかのように、「主のいない城館」なのである。

このようにしてみると、「城（館）」と「ふもとの町（村）」という空間的な対比、さらには、「城（館）の主の不在」という点において、カフカとニェムツォヴァーの作品は共通点を見出すことができる。もちろん、作品の全体的な世界観は異なっており、同列に扱うことはできない。だが、カフカ作品の深層にニェムツォヴァーの世界が広がっていることは両者の作品を読むことで感じられるであろう。

先の引用でカフカは Sprachmusik という表現、つまり言語の音楽性を強調しているが、そのことを裏付けるかのように、カフカ家の三人の娘の養育係として、1902年10月から約一年、カフカ家に暮らしたアンナ・ポウザロヴァーは、カフカが妹たちに『おばあさん』を読み聞かせていたという証言をしている(※6)。ニェムツォヴァーの作品、とりわけ『おばあさん』は、農村の老婆の口承の語りをうまく活用した作品であり、カフカもまたその口承性という点においてもニェムツォヴァーに魅力を見出していたかもしれない。だがここで立ち止まって考えてみたいことは、はたして、ニェムツォヴァーの作品はただ単にチェコ的な世界を表出するものでしかないのかという点である。

4　Ibid., s. 314.
5　ボジェナ・ニェムツォヴァー『おばあさん』（栗栖継訳）、岩波文庫、1971年、334ページ。
6　ハンス＝ゲルト・コッホ編『回想のなかのカフカ 三十七人の証言』（吉田仙太郎訳）、平凡社、1999年、83-101ページ。

2. シュティフターを読むニェムツォヴァー

チェコ文学者ヤロスラヴァ・ヤナーチコヴァーは、ボヘミアという文脈において、ニェムツォヴァーの位置づけを試みている。彼女によれば、ニェムツォヴァーが1853-1860年の間にかけて記したメモのなかには、ボヘミアのある作家の作品名が記されているという。それは、南ボヘミア出身の作家アーダルベルト・シュティフターの『私の曾祖父の書類綴り *Die Mappe meines Urgrossvaters*』［既訳邦題は『曾祖父の遺稿』］である。1841-42年に初稿を仕上げたのち、晩年の1864-1868年にいたっても最終稿に取り組んだ作品であるが、ニェムツォヴァーは第二稿を収録した1847年刊の『習作集』を読んでいた可能性が高いと指摘されている(※7)。年代記の形式をとる『曾祖父の遺稿』では、物語の語り手が曾祖父の書類綴りを偶然発見したことから、曾祖父の「庶民の家の、知られざる歴史」(※8)をたどっていく。そこで披露されるのは「とりとめもない物語」の数々であるが、曾祖父の遺稿を読みながら、語り手である曾孫は知られざる「生の鎖」を意識する。

いうまでもなく、曾祖父の遺稿を書き写す曾孫の営みと「おばあさん」の語りを物語として綴る孫バルンカ（ニェムツォヴァー本人とされている）の眼差しの基本的な構造は重なっているほか、南ボヘミアの架空の地ピルリングとシレジアのスタレー・ビェリドロの自然描写にも呼応する点がある。だが語り手が関心を寄せる対象は、前者はプラハ大学出身の医師／男性であるのに対し、後者は農村暮らしで文字が読めない「おばあさん」である。シュティフターにおいては社会的な地位のある男性という父権的構図があり、ニェムツォヴァーにおいては、文盲の女性という母権的な関係性が前景化し、鏡映しのような関係性を構築している。そしてまた、シュティフターにおいて、曾孫は曾祖父が残した文書を読み解く、つまり、テクスト解読による考古学的アプローチがなされているのに対し、ニェムツォヴァーの「おばあさん」は文字を知らない語り手として口伝えで語っていく。

> 「わたくしは子どもたちをきちんきちんと学校へやりました。わたくしの若いころは、女の子は字が書けず、読めさえすればよかったのでございますが、それも都会の女の子にかぎられていたのでございます。でもせっかくすぐれた才能を持って生まれた人間が、字が書けないばかりに、それを人に伝えられないというのは、残念なことでございますし、罪なことでもございます。と申しましても、覚える機会のないときはどうしようもございません。なくなったわたくしの主人などは、世の中のことをよく知っていた上に、字も書けたのでございます。つまり俗に言いますように、荷車にも馬車にも向いたのでございます。これはよいことでございますし、なろうと思えば誰でもなれるのでございます」(※9)

7　Jaroslava Janáčková: Rané setkání Boženy Němcové s Adalbertem Stifterem: Jeden klíč k Babičce, in: *"Božena Němcová a její Babička. Sborník příspěvků z III. kongresu světové literárněvědné bohemistiky. Hodnoty a hranice. Svět v české literatuře, česká literatura ve světě. Praha 28. 6. – 3. 7. 2005. Svazek 3."* Praha: Ústav pro českou literaturu AV ČR, 2006, s. 73-74.

8　アーダルベルト・シュティフター『曾祖父の遺稿』（玉置保巳訳）、『シュティフター作品集第1巻』、松籟社、2000年、155ページ。

9　ニェムツォヴァー『おばあさん』、157-158ページ。

ニェムツォヴァーにとって、シュティフターとの出会いは「自分の家系のみならず、生活の規律そのものにとっても本質をなす価値の担い手、年老いた存在を選択する」(※10)契機になったとヤナーチコヴァーは推察しているが、老人の視線を通した物語という基本構造に刺激を受けた可能性は否定できないにしても、両作品はまったく異なる性質を有している。というのも、ニェムツォヴァーは農村の女性という語り手を設定することで独自の小説世界を切り開いたからである。いずれにしても、カフカがニェムツォヴァーの Sprachmusik に刺激を受けていたとしても、ニェムツォヴァーの言葉の下層にもまた、エルベンらチェコ語の作家だけではなく、シュティフターなどドイツ語の作家の声が響いている可能性があり、それはいずれも「ボヘミア」空間を象徴する複層的な現象であるといえる。

さらに、19世紀後半におけるボヘミア・モラヴィアの文学の状況を概観したときに、そこには、ニェムツォヴァーの世界に共鳴しているひとりのドイツ語の作家がいることに気づく。チェコ系の養育係に育てられ、チェコ系、ドイツ系問わず、モラヴィアの人びとを作品に描いたモラヴィア地方のズジスラヴィツェ出身のマリー・フォン・エブナー＝エッシェンバッハ（1830-1916）である。ここではこれ以上触れないが、カフカが述べた Sprachmusik はこのような複層的な声が共鳴し合う空間の音として捉えられる可能性を秘めている。

3. ランゲルを読むカフカ

次に着目したい人物は、プラハ最後のヘブライ語詩人とも称されるイジー（ゲオルク）・ランゲル（1894-1943）である。カフカと同じくユダヤ系の商人の家、つまり同化ユダヤ人の家庭に生まれたランゲルはユダヤ的な習俗をほとんど失った世代に属している。カフカがドイツ語で公教育を受けたのに対し、ランゲルはチェコ語の教育を受けている。20世紀初頭のプラハにおいて、ドゥルーズ、ガタリが指摘したように、少数派であるユダヤ系の住民は、多数派の言語を用いて執筆する可能性しか残されていなかったのはまさにこのような公教育の環境に依拠するものである。しかしながら、ドゥルーズ、ガタリがカフカに関心を寄せるあまり看過しているのが、チェコ語で執筆をするユダヤ系作家の事例である。その例として、リハルト・ヴァイネル（1884-1937）が該当する。ヴァイネルはチェコの新聞の特派員としてパリに滞在し、シュルレアリスムの傍系グループ「大いなる賭け」のメンバーらと交流するも、生涯チェコで執筆を続けたが、それに対して、ランゲルはチェコ語で執筆するだけに留まらなかった。ドイツ語、チェコ語、ヘブライ語の三つの言語で執筆活動を行なったからである。ドイツ語では『カバラの性愛』（1923）、チェコ語ではハシディズムの民間伝承をもとにした小説『九つの門』（1937）、ヘブライ語では詩作を行なっている。とりわけ、当時のプラハにおいて、ドイツ語とチェコ語という主たる二つの言語のみならず、ヘブライ語という第三の選択肢を積極的に選んだことは、20世紀のユダヤ文学全体においても特異なことである。

まず、簡単に生涯を振り返ってみよう。プラハで1894年4月7日、ランゲルは三人兄弟の三男として生まれている。長男はチャペック世代に属する作家・戯曲家フランチシェク・ランゲルであった。イ

10　Janáčková: ibid., s.75.

ディッシュ語演劇に魅了されたカフカと同様、イジーは、友人のアルフレート・フクスの影響もあり、ガリツィアのユダヤ人に関心を抱き始める。1913年、19歳になると、ガリツィアのベルツ（現ウクライナ）に赴き、現地でハシディズムの修行に取り組む。1915年には、ガリツィアから帰還するが、カフカとの親交は、ちょうどそのころから始まっている(※11)。カフカとはランゲルのいとこにあたるブロートの仲介によって知り合ったとされ、宗教面での関心を共有しカフカはランゲルからヘブライ語を学んでいる。ランゲルは、その後、プラハのユダヤ学校、シオニズム協会の事務局で勤めながら、執筆活動を行なっている(※12)。1929年、ヘブライ語の詩集を発表するが、彼は、当時のプラハにおいてヘブライ語で執筆する唯一の詩人だった。1939年、スロヴァキアを経由して、パレスチナに向かい、1943年、マックス・ブロートに看取られながら、テル・アヴィヴで他界する。没後、ヘブライ語の第二詩集がテル・アヴィヴで刊行されている。

カフカは第一次世界大戦直後にフリードリヒ・ティーベルガー（1888-1958）からヘブライ語を教わっているが、聖典のヘブライ語の専門家であったため、日常会話の実践を切望していたカフカはおそらく1915年秋ころから、イジー・ランゲルのもとでヘブライ語をマックス・ブロートらとともに教わっている(※13)。

ランゲルは、テル・アヴィヴの日刊紙『ヘイゲイ』の編集者に宛てた1941年2月23日付の手紙の中で『カフカの想い出』という文章を書いているが、そこから浮かびあがってくるのが、ランゲルのヘブライ語の詩を読むカフカの姿である。

> 私の初めての詩が――エリーゼル・シュタインマンの雑誌『声』に――発表されたとき、中国の詩にすこし似ているとカフカは私に言った。私はすぐに出かけて、フランソワーズ・トゥッサンのフランス語訳による中国詩の選集を購入し、それからというもの、その大切な本は私のテーブルを離れたことはない。カフカは私の詩を読んだと言ったが、彼はヘブライ語ができたのか？　そのような細部を伝記作家たちは記していないのか？　そう、カフカはヘブライ語を話していた。最後のころは、二人でつねにヘブライ語を話していた。彼はくりかえしシオニストではないと疑念を払い、中年になってから私たちの言葉を習いはじめたが、たいへん熱心に学んでいた。他のプラハのシオニストたちとは異なり、流暢なヘブライ語を話していた。特別な満足感を憶えていたようで、言葉の知識に誇りを感じていたといっても言い過ぎではないだろう。あるとき、一緒に路面電車に乗ることがあり、プラハの上空を旋回していた飛行機をめぐって言葉を交わしていた。車内のチェコ人たちには快適な音に聞こえたのだろう、何語で話しているのかと訊ねてきた。どういう言葉で、何

11　カフカの「日記」にランゲルの名前が初めて現れるのは1915年9月14日である。

12　主に寄稿したのは、ドイツ語では『自衛 *Selbstwehr*』『ユダヤ年報 *Jüdischer Almanach*』、チェコ語では『ユダヤ報知 *Židovské zprávy*』『発展 *Rozvoj*』『チェコ・ユダヤ年報 *Kalendář česko-židovský*』などであり、ウィーンの『イマーゴ *Imago*』にも精神分析関連の論考を寄せている。

13　後年ミリアム・シンゲルは次のように語っている：「永い年月を経たいまとなっては、いきさつがどうだったのかは憶えていないが、わたしはカフカとフェーリクス・ヴェルチュといっしょにヘブライ語の講習会をやめ、マックス・ブロートの親戚のイジー・ランゲルのもとで『私的レッスン』のようなものをうけるように決めたことは憶えている。この青年は、若さというものが濃い髭と、こめかみの巻き毛に蔽い隠されて、年齢不詳であった。」［ハンス＝ゲルト・コッホ『回想のなかのカフカ』（吉田仙太郎訳）、平凡社、1999年、228ページ］

を話しているか、伝えると、ヘブライ語で飛行機のことも話題にできるのですねと彼らは驚いていた……。そのときのカフカの顔は喜びと誇りにあふれ、とても輝いていた！　私からヘブライ語の新しい単語を教わる度に、まるで大きな獲物を捕まえたかのように彼は喜んでいた。もちろん、楽しみのためにヘブライ語でも読書をしていた。冗長に書いたり、わざと変な言葉を使う、雄弁な作家は彼の好みではなかった。そういう作家について、奴らはヘブライ語の語彙の知識を見せびらかそうとしている、とも言っていた。(※14)

ランゲルがヘブライ語で書いた詩は、ワルシャワで1923-1924年に刊行されたエリーゼル・シュタインマン（1892-1970）主宰の雑誌『声 Kolot』に掲載され、カフカもまたその詩を読んだのであろう。カフカは中国の詩との類似を指摘しているが、のちにランゲルは中国の詩に傾倒し、『李白の詩に』という詩を書いている。さらにランゲルはカフカのヘブライ語能力についても触れ、かれらのコミュニケーション言語がヘブライ語であった旨を記している。カフカは、1922-23年にかけて、パレスチナ出身のプア・メンツェル＝ベン＝トヴィムからヘブライ語のレッスンを受けているが、ランゲルの詩が雑誌に掲載されたのは、1923年もしくは1924年であることから、カフカの晩年においても両者の交流があったことが窺え、とりわけ、聖書のヘブライ語よりも、会話のヘブライ語に関心を寄せていたことがわかる。ランゲルは先の文章でカフカが流暢にヘブライ語を話していたと証言している。著書『カフカとカバラ』のなかで、グレーツィンガーはランゲルについて「ハシディズムの教理およびカバラの教理に関するその内的実体・知識をカフカに責任をもって伝えた」(※15)と述べているように、カフカにとってランゲルの存在は単なる友人である以上のものであったといえるだろう。

4.『九つの門』を書くランゲル

マックス・ブロートも「ヘブライ語とハシディズム世界の倫理」(※16)をランゲルから教わったと記しているが、ランゲルもまた当初からハシディズムの理解者であったわけではなく、カフカ同様、同化ユダヤ人として、ユダヤ教、イディッシュ語から隔絶されたプラハという環境に暮らしており、彼にとってもまた東方ユダヤ人との出会いは衝撃的なものであった。ランゲルは、三千人を超える住民の半分がユダヤ人であるベルツにたどりついた時の様子を著書『九つの門』で次のように綴っている。

何百もの質問が四方から私に投げかけられる。私は困惑して立ちつくす、ひとことも分からなかったからだ。イディッシュ語を話すのを聴いたことはそれまで一度もなかった。中世のドイツ語とヘブライ語、ポーランド語、ロシア語の複合語をそれまで知らずにいた。そのあと、すこしずつわかるようになった。(※17)

14　Jiří Langer: *Studie, recenze, články, dopisy*. Praha: Sefer, 1993, s. 139-140.
15　カール・エーリヒ・グレーツィンガー『カフカとカバラ』(清水健次訳)、法政大学出版局、1995年、24ページ。
16　Max Brod: *Der Prager Kreis*. Stuttgart - Berlin - Köln - Mainz: Kohlhammer, 1966.
17　Jiří Langer: *Devět bran*. Praha: Sefer, 1996, s. 35.

つまり、プラハ時代にはイディッシュ語をまったく耳にしたことがないという事実であり、そればかりかまったく理解できないという感覚である。ガリツィアのユダヤ共同体あるいはハシディズムについて、カフカをはじめ、当時の多くのユダヤ系知識人が多大な関心を寄せていたにもかかわらず、現地に直接赴くことは稀であった。そのようななか、ランゲルは現地に三度赴き、奇跡のラビ、イザハル・ドヴ・ロケアフ Jisachar Dov Rokeach（1854-1926）のもとで修練を積む。ランゲルは、同書の冒頭でガリツィアのベルツに向かい、その後『九つの門』を執筆し理由をこう記している。

> どうして私たちはここにいるのか？　どうして故郷で主に仕えないのか？　ラビになるためだろうか、それとも、ベルツの我らが聖人のような非の打ち所のない聖人となるためだろうか？――いや、そういうことではない。こういったことは私たちの頭をよぎることすらない。ラビになりたいと思うこともなければ、私たちが聖人となることもけっしてない。それはよくわかっている。聖人の方が周囲にふりまく神の高貴な光に浴したいだけなのだ。一生涯、ずっと、たえることなくその喜びに浴していたいのだ。いつの日か、我が聖人は私たちに永遠の別れを告げ、別の聖人を、最初に生まれし者の息子を、自分より偉大ではないかもしれないが、けっして小さくはない聖人を残すことになるのを、私たちは知っている。多くのものはすでにそのことを確信している。未来は、かれらに真実を授けたのだ。だが、そのことについては今、判断することはできない。私はただ、敬虔派（ハシド）の生活の一風景を描いていきたいと思うだけなのだ。(※18)

同書ではもちろんシオニズムに関する語彙は一度も用いられることはなく、この一節からも奇跡のラビと称される聖人に近づきたいという純粋な想いが伝わってくる。だが、同時にこの書物を読む人は誰かという点に着目すべきであろう。ランゲルは、この書物をヘブライ語ではなく、チェコ語で書いている。つまり、敬虔派の教義をユダヤ教徒に伝えるためではなく、ランゲル同様、イディッシュ語すら知らない、ユダヤ教との関係が希薄な人びとに向けて、この書物を綴ったという点である。それゆえ、日常では知りえない敬虔派の未知の生活の姿、かれらの信仰のあり方が綴られていくのだが、そこには、他者としての眼差しが介在している。だが、そのことによって、この書物は単にハシディズムの書ということではなく、ハシディズムとどのような関係性を構築するかというランゲルの葛藤の書ともなっている。同書は、九つの門をくぐっていくように、ハシディズムにまつわる九つのエピソードが連なっており、読者はひとつひとつ門をくぐっていくことになる。グレーツィンガーが「ランゲルは、彼の再話のなかで、たとえばブーバーやエリ・ヴィーゼルのように哲学化され、ロマン主義化された翻訳よりもはるかにハシディズムの真実に近付いている」(※19)と述べているように、多くの論者のハシディズムの知識が書籍を媒介したものであったのに対し、自身の体験がもとになっているため、ランゲルにおいて

18　Ibid., s. 48.

19　カール・エーリッヒ・グレーツィンガー「東方ユダヤの物語における天の裁きと死霊と幽明界」（西村祐子訳）、グレーツィンガー他編『カフカとユダヤ性』、教育開発研究所、1992年、172ページ。

は、独特な視線、特に他者としての視線が特徴的になっている。時にアフォリズム的な要素や寓話的な様子を含み、そして脱線をくり返しながら物語が展開する同書の特徴は、機知と洞察の見事な配分である。それは、次の一節からもわかるであろう。

> トーラーのそれぞれの文字には奥深い謎が潜んでいる。より高貴な謎は母音に、さらに大きな謎は音調にある。だがもっとも高貴な謎は、あらゆる方向が文字で覆われているまだ描かれていない白い海に埋もれている。誰にもこの謎を読み解くことはできず、誰も、何人も捉えることができない。ペルガモンの白の謎はそれほど広大で、この全世界もそれを捉えることができない。それは、謎にとって、ふさわしい容器ではない。未来の世界が訪れれば、それを理解するはず。そうなると、トーラーに書かれてあることは読まれなくなる、読まれるようになるのは、そこに書かれていないこと、つまり白いペルガモン。(※20)

同書は、1937年にプラハのヨーロッパ文学クラブから出版されているため、カフカ本人はこの書物を読んではいない。しかしながら1915年10月6日付の日記には「ランゲルのユダヤ物語集」としてランゲルから伝え聞いた話が記されており、カフカが『九つの門』に類する話をランゲルから（おそらくヘブライ語で）聞いていた可能性は十分にあるだろう。

カフカの没後、ランゲルは『詩人の死に際して』という詩をカフカに捧げている。詩人の死を、神との結婚に譬える詩篇は、カフカとの対話を実現すべく、ヘブライ語で執筆されている。このようにヘブライ語という媒介言語によって、カフカはランゲルと繋がり、ランゲルはベルツの敬虔派の人びとと繋がることになった。そしてその世界はヘブライ語によって閉じられるものではなく、カフカによるドイツ語の著作、そしてランゲルがチェコ語で執筆した『九つの門』においても広がりを見せている。

5.「プラハ／ボヘミア文学」というテクスト

「読書」行為を介した作家間の影響関係を検討するアプローチはこれまでも様々な形で行なわれてきた。だが、プラハのユダヤ系のドイツ語作家たちの位相を考えるうえで、媒介言語としての特性を考慮すると、複数の言語の「読書」体験はきわめて肝要であると言える。「ドイツ語」作家カフカの深層には、一方で「チェコ語」を介したニェムツォヴァーの読書体験があり、他方で「ヘブライ語」を介したランゲルとの関係があり、これらすべての要素が複雑に絡み合っている様態こそが「プラハ／ボヘミア文学」であり、そのなかで媒介役を担っていたのはユダヤ系作家だとも言える。だが留意しなければならないのが、作家間の影響関係は決して一方向的なものだけではなく、複層的な関係性がある点である。様々な織り目をなす「プラハ／ボヘミア文学」というテクストは、読書のあり方に応じて、多様な読みの可能性を提示してくれている。

20　Langer: *Devět bran*, s. 116.

参考文献

Max Brod: *Der Prager Kreis*. Stuttgart - Berlin - Köln - Mainz: Kohlhammer 1966.

Jaroslava Janáčková: Rané setkání Boženy Němcové s Adalbertem Stifterem: Jeden klíč k Babičce. In: *Božena Němcová a její Babička. Sborník příspěvků z III. kongresu světové literárněvědné bohemistiky. Hodnoty a hranice. Svět v české literatuře, česká literatura ve světě. Svazek 3.* Praha: Ústav pro českou literaturu AV ČR, 2006, s. 73-82.

Walter Koschmal: *Der Dichternomade: Jiří Mordechai Langer, ein tschechisch-jüdischer Autor*. Köln: Böhlau, 2010.

Jiří Langer: *Studie, recenze, články, dopisy*. Praha: Sefer, 1993.

Jiří Langer: *Devět bran*. Praha: Sefer, 1996.

Jiří Langer: *Básně a písně přátelství*. Překlad a komentář Denisa Goldmannová. Praha: P3K, 2014.

Marek Nekula: *Franz Kafkas Sprachen „…in einem Stockwerk des innern babylonischen Turmes…“*. Tübingen: Niemeyer, 2003.

Božena Němcová: *Babička*. Praha: Nakladatelství Lidové noviny, 1999. Božena Němcová: V zámku a v podzámčí, in: *Povídky*. Praha: Nakladatelství Lidové noviny, 2002.

Adalbert Stifter: *Werke und Briefe : historisch-kritische Gesamtausgabe. Band 6-1. Die Mappe meines Urgrossvaters*. Stuttgart : Kohlhammer, 1998.

Adalbert Stifter: *Werke und Briefe : historisch-kritische Gesamtausgabe. Band 6-2. Die Mappe meines Urgrossvaters*. Stuttgart : Kohlhammer, 2005.

Adalbert Stifter: *Werke und Briefe : historisch-kritische Gesamtausgabe. Band 6-3. Die Mappe meines Urgrossvaters*. Stuttgart : Kohlhammer, 1999.

Hans Dieter Zimmermann: Franz Kafka liest Božena Němcová. In: *Brücken : Germanistisches Jahrbuch Tschechien-Slowakei. Neue Folge.* Jahr. 15/1-2, 2007, S. 181-192.

アーダルベルト・シュティフター『曾祖父の遺稿』（玉置保巳訳）、『シュティフター作品集第1巻』、松籟社、2000年。

ボジェナ・ニェムツォヴァー『おばあさん』（栗栖継訳）、岩波文庫、1971年。

第 4 章

ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉の継受

島田 淳子

はじめに

〈プラハのドイツ語文学〉は、一般的に第二次世界大戦を機に途絶えたと考えられている(※1)。なるほど、この文学現象を支えたチェコ・ドイツ・ユダヤという三民族の共存状態、および、チェコ語とドイツ語の多言語環境は、ナチスによるホロコーストと戦後のドイツ系住民国外追放の結果失われてしまった。しかしながら実際は、第二次世界大戦後もドイツ語で執筆するチェコの作家が少数ながら存在した。本稿では、こうした作家の代表としてレンカ・ライネロヴァー Lenka Reinerová (1916-2008) とリブシェ・モニーコヴァー Libuše Moníková (1945-1998) を取り上げ、両作家が〈プラハのドイツ語文学〉の伝統をいかに引き継いでいるかを考察する。具体的には、両作家の〈プラハのドイツ語文学〉理解を確認したうえで、それが両者の文学作品と言語選択にいかなる影響を与えているかを明らかにする。そうすることで、従来の〈プラハのドイツ語文学〉の時間的枠組みを戦後まで拡大する可能性を探る。

1. レンカ・ライネロヴァー

1.1 経歴

レンカ・ライネロヴァーは、1916年、ユダヤ系チェコ語話者の父とユダヤ系ドイツ語話者の母の間に生まれ、チェコ語とドイツ語のバイリンガルとして育った。彼女は、1930年代、亡命ドイツ人による新聞『労働者画報 *AIZ: Arbeiter-Illustrations-Zeitung*』の編集に携わるなかで、ルポルタージュ作家キッシュ Egon Erwin Kisch をはじめ多くのプラハのドイツ語作家と知り合った。第二次世界大戦勃発とともにパリ経由でメキシコに亡命した彼女は、戦後プラハに戻ってから、家族全員がホロコーストで命を落としたことを知る。共産主義化したチェコスロヴァキアでもジャーナリズムに携わり続けたが、彼女を取り巻く環境は決して容易なものではなかった。例えば彼女は、粛清の嵐が吹き荒れる50年代に秘密警察による逮捕・名誉剥奪を、チェコ事件後の正常化時代に作家活動停止処分を経験している。こうした中、ライネロヴァーは1983年から東ベルリンのアウフバウ社 Aufbau Verlag を介してドイツ語で執

1 Goldstücker, Eduard: *Die Prager deutsche Literatur als historisches Phänomen.* In: *Weltfreunde. Konferenz über die Prager deutsche Literatur.* Prag 1967, S. 21f.

筆した作品を出版し始めた。体制転換後国内での作家活動が認められてからは、それまで書きためた作品を出版するとともに新たな作品の執筆にも精力的に取り組み、「プラハ最後のドイツ語作家」として注目を集めた。彼女が2006年に創設した「プラハ文学館 Prager Literatur Haus deutschsprachiger Autoren / Pražský literární dům autorů německého jazyka」は、今日も〈プラハのドイツ語文学〉の普及と若手ドイツ語作家の育成に大きく貢献している。

1.2 文学カフェというトポス

「作家 Schriftstellerin / spisovatelka」ではなく「語り手 Erzählerin / vypravěčka」を自称するライネロヴァーの作品には(※2)、自伝的・エッセイ的なものが多い。とりわけ黄金時代と呼ばれる第一共和国時代を生きた彼女にとって、当時のプラハの雰囲気を現代に伝えることは、文学創作における最大のテーマであった。例えば彼女は、代表作『あるプラハ人の夢のカフェ *Das Traumcafé einer Pragerin*』(1996)で、両大戦間期に活躍した作家との個人的な思い出をもとに、当時のプラハの文化的背景を生き生きと描き出している。この作品は、作者の分身である語り手が、「夢のカフェ」という架空の空間を舞台に、両大戦間期のプラハで活躍した作家や芸術家と言葉を交わしてゆくというものだ。

> いったいどこに［…］カフェは消えてしまったのかしら？　そこではみんな、［…］半日、いやほとんど一日中、議論をしたり、計画を立てたり、多くの情報を得たり［…］できたのだけれど。そんな逃避先 Zufluchtswinkel はもうとっくの昔になくなってしまったから、私は今や全く個人的なプラハの夢を楽しく紡ぎだすのです。(※3)

この作品の舞台である「夢のカフェ」は、19世紀末から第二次世界大戦勃発までの間プラハに数多く存在した文学カフェをモデルとしている。ライネロヴァーはこの作品舞台の描写に際して、プラハのドイツ文学研究者ゴルトシュトュケルが提唱した〈プラハのドイツ語文学〉のコンセプトを参照しているように思われる。ゴルトシュトュケルは、1960年代、共産主義社会におけるカフカ文学の再評価を求める「カフカ会議」を主催し、〈プラハのドイツ語文学〉研究を先導した。彼は本作で、今は亡き作家や芸術家が集う「夢のカフェ」に唯一現存する人物として現れ、他の客が彼をいかに手厚くもてなしたかを語り手に告げる。

> 「ここでの歓迎は自然で心が込もっていたよ。カフカは立ち上がってわたしを出迎えてくれた。ヴェルフェルは、背凭れの代わりに雲のクッションを添えて馴染みのソファを差し出してくれたし［…］、ヤロスラフ・サイフェルトとフランチシェク・ランゲルは近頃のプラハの成長を喜んでいるようだったし。皆わたしに迫ってきて、1963年にリベレツで開かれたわたしのカフカ会議について、信憑性のある報告を聞きたがってね。まるでこの会議がつい昨日起こったばかりで、それについてほとん

2　Vgl. Lidovky.cz: *Sahám jen do své zásoby zážitků.* http://www.lidovky.cz/saham-jen-do-sve-zasoby-zazitku-d3j-/kultura.aspx?c=A061130_092310_ln_kultura_znk（最終閲覧日2017年5月9日）

3　Reinerová, Lenka: *Das Traumcafé einer Pragerin.* Berlin 2008, S.7.

ど何も知らないとでもいうように」(※4)

ここで興味深いのは、カフカやヴェルフェルといったドイツ語作家だけでなく、サイフェルト Jaroslav Seifert やランゲル František Langer などチェコ系の作家までもがゴルトシュトュケルを歓迎している点である。こうした描写から分かるのは、ライネロヴァーが〈プラハのドイツ語文学〉という文学現象を、ドイツ語作家に限らず両大戦間期のプラハに生きたすべての作家の問題として捉えていたという点である。

民族対立の激しかった19世紀末のプラハでは、劇場や教育機関など多くの公共空間がチェコ系とドイツ系に色分けされており、文学カフェもその例に漏れなかった。しかしながら実際は、多くの作家がこの民族的、言語的境界を越えて交流していたようである。例えば、当時のプラハのドイツ語作家の代表的存在であったブロートは、チェコ文化とドイツ文化の仲介者としても知られているし、カフカの恋人として知られるチェコのジャーナリスト、ミレナ・イェセンスカー Milena Jesenská も、ドイツ語作家の溜まり場であったカフェ・アルコに足繁く通っていたという(※5)。こうした両大戦間期のプラハの文学カフェにおける民族的、言語的境界を超えた交流は、まさに、「夢のカフェ」におけるチェコ系作家とドイツ系作家の共存状況に反映されている。

さらに注目すべきは、ライネロヴァーの「夢のカフェ」にはプラハ出身の作家だけでなく、思想家エルンスト・ブロッホ Ernst Bloch や、出版人ヴィーラント・ヘルツフェルト Wieland Herzfeld など、一時的にプラハに滞在したドイツからの亡命者の姿も多くみられる点だ。ここで念頭に置かれているのは、明らかに1930年代の国際社会におけるプラハの役割である。ドイツでヒトラーが政権を掌握した1933年からミュンヘン協定が締結される1938年まで、プラハはドイツの反ファシズム作家の主要な亡命先であった。亡命ドイツ人を積極的に支援していたライネロヴァーにとって、ナチス・ドイツからの亡命者の受け入れ先としてのプラハの側面は、「黄金時代」を描き出すうえで欠かせない要素であったに違いない。そう考えると、上の引用で彼女が文学カフェを指して用いた Zufluchtswinkel という語には、ナチスからの「避難所」という含意が込められていることが分かる。

以上のような反民族主義的、反ナチズム的傾向は、まさに1960年代にゴルトシュトュケルが〈プラハのドイツ語文学〉を特徴づける重要な要素として指摘している点である。

我々の考えるプラハのドイツ文学は、ドイツ民族への所属意識を持っていたにもかかわらず、いかなる作家もチェコ人に対する攻撃的で民族主義的な立場を取らず、一人として反ユダヤ主義の影響下にいなかったという点で、いわゆるズデーテン・ドイツ文学とは異なっている。(※6)

このようにライネロヴァーは、〈プラハのドイツ語文学〉のコンセプトを基盤としつつ、両大戦間期のプラハの文化的・政治的状況を象徴するトポスとして、「夢のカフェ」という舞台を描き出しているのである。

---

4 Ebd., S. 20.

5 Wagnerová, Alena: *Milena Jesenská: Biographie.* Mannheim 1994, S. 46.

6 Goldstücker: a.a.O., S. 25.

1.3 ドイツ語執筆の意図

チェコ語とドイツ語のバイリンガルであったライネロヴァーは、当初はチェコ語でも文筆活動を行っていた。しかしながら彼女は体制転換後、執筆言語を完全にドイツ語に切り替えている。なぜ彼女は、ドイツ語文化の失われた現代のプラハで、チェコの歴史や文化に根差したテーマをドイツ語で書くという、屈折した執筆スタイルをあえて選びとったのだろうか？

プラハ出身のユダヤ系ドイツ語作家であるライネロヴァーは、まさに両大戦間期のプラハの多民族・多言語環境の只中で生まれ育った。しかしながら、第二次世界大戦中のメキシコ亡命から帰還した彼女は、故郷の大きな変貌を目の当たりにする。

> わたしはとうとう故郷に帰ったが、それは喜ばしい再会ではなかった。ここは本当にまだわたしの故郷なのかしら。わたしは最初、改めて少しずつプラハの手触りを確かめなければならなかった。城も教会も家々も橋も、幸運なことにかつてのままそこにあり、それどころか全く無傷で、ベオグラードのようにぱっくりと開いた割れ目もなかった。しかし、人通りの多い街路はよそよそしかった。顔から顔へ視線を彷徨わせても、見知った顔はひとつもなかった。(※7)

ホロコーストによるユダヤ系住民の虐殺と、戦後のドイツ系住民追放の結果、プラハはかつての民族的、言語的多様性を喪失した。それはライネロヴァーにとって、自身のアイデンティティの一部が削ぎ落されるような衝撃的な出来事であったに違いない。彼女にとって「夢のカフェ」を描きだすことは、失われた自身のアイデンティティを回復する行為だったといえる。しかもこの行為は、彼女があえてドイツ語執筆を選択することによって、一個人のアイデンティティの問題を超えるより大きな意味を持つ。ドイツ語作家との結びつきの強かったライネロヴァーは、「プラハのドイツ語作家の生き残り」としての意識を強く持っていた(※8)。両大戦間期の多民族・多言語環境を記憶する者が日に日に減少してゆく中、彼女が〈プラハのドイツ語文学〉の継承者として創作活動を展開することは、かつてプラハに生きていた芸術家や、彼らが生きた時代、その雰囲気を現代によみがえらせ、それが忘却されることに抗う行為でもあったのである。

2. リブシェ・モニーコヴァー

2.1 経歴

両大戦間期を生きた「プラハのドイツ語作家の生き残り」であるライネロヴァーと違い、戦後のプラハで生まれ育ったモニーコヴァーは、プラハのドイツ語作家と直接的な接点を持っていたわけではない。

7　Reinerová: *Zu Hause in Prag manchmal auch anderswo.* Praha 2003, S. 90.

8　Vgl. Radio Praha: *Lenka Reinerová -a writer who keeps the rich tradition of Prague German literature alive.* http://www.radio.cz/en/section/books/lenka-reinerova-a-writer-who-keeps-the-rich-tradition-of-prague-german-literature-alive（最終閲覧日2017年5月9日）

しかし〈プラハのドイツ語文学〉、とりわけカフカの存在は、彼女の文学作品において重要な役割を果たしている。

1945年プラハに生まれたモニーコヴァーは、1963年からプラハ・カレル大学哲学部でドイツ文学と英文学を学んだ。1970年、ゴルトシュトュケルのもとで博士号を取得した後、前年ゲッティンゲン留学中に知り合ったドイツ人男性と入籍、1971年に西ドイツに移住した。当初は大学講師としてドイツ文学を教えていたが、1981年、処女作『加害』の出版を機にベルリンで創作活動を開始する。1983年に第二作『亡き王女のためのパヴァーヌ *Pavane für eine verstorbene Infantin*』を発表、1987年には代表作『ファサード *Die Fassade*』でデーブリーン賞を受賞する。ビロード革命後もベルリンで創作活動を続け、1989年にはカフカ賞を、1991年にはシャミッソー賞を受賞、死の前年1997年には祖国チェコの大統領ヴァーツラフ・ハヴェル Václav Havel から功労賞を授与されている。

2.2 モニーコヴァーのカフカ解釈

モニーコヴァーをはじめ共産主義時代を生きた多くの作家や知識人にとってカフカの作品は、自らを取り巻く現実社会と分かちがたく結びついた極めてリアリスティックな文学であったようだ。例えばゴルトシュトュケルはカフカ文学への関心が急激に高まった1960年代のプラハを振り返りながら、「カフカは、端的に言うと、スターリニズムと冷戦の時代に我々が陥った疎外状態を打破する戦いの中心点となった」と述べている(※9)。また、1970年代にフランスに亡命したチェコの作家クンデラ Milan Kundera は、1950年代に粛清裁判で逮捕された被告人の多くが、共産党を絶対視するあまり、実際に犯していない罪を自白したという「カフカ的」な事例を挙げながら、フランスでは難解かつ抽象的な作品として捉えられるカフカ文学が、チェコでは極めて日常的な事柄と結びついている点を指摘している。

> 現代史には大きな社会的規模でカフカ的なものを産み出す様々の趨勢がある。自己神格化を目指す権力の段階的な集中化。あらゆる制度を果てしない迷路に変えてしまう社会活動の官僚化。そこに由来する個人の没人格化。
>
> こうした趨勢の極端な集中としての全体主義国家は、カフカの小説と実生活との密接な関係を明るみに出した。(※10)

ここで彼は、カフカの小説の中に、絶対的な共産党権力を頂点とするスターリン体制下のヒエラルヒーと、その中で個性を失ってゆく人々の姿を見出している。

ゴルトシュトュケルやクンデラと同様モニーコヴァーも、不条理と閉塞感に満ちたカフカの作品世界と自らが経験した共産主義社会を照らし合わせている。例えばエッセイ『言説としての城――投影が生み出す権力 *Das Schloß als Diskurs. Die Entstehung der Macht aus Projektionen*』において彼女は、『城』にお

9　Liehm, Antonin: *Generace.* Köln 1988, S. 177.

10　ミラン・クンデラ『小説の技法』(西永良成訳)、岩波書店、2016年、149-150ページ。

ける村の描写を全体主義国家の構造と結び付けて読み解いている。

> 投影のシステムを持続するためには、関係者全員がその構造に絶えず働きかける必要がある。全体主義的空間は、住民がシステム内の事件に全関心を傾け、そこから刺激を受けようとするほど、脱出不可能な空間になる。
> […]
> 退屈さが定められ、刺激に飢えれば、人々は迷いなくより高い目的に調和し、素朴な感覚欲求を離れて空虚なものに意味を見出そうという情熱に近づくようになる。(※11)

モニーコヴァーは、雪に閉ざされた村に生きる人々は、共同体の外から刺激を得られないせいで無気力状態に陥っており、唯一の関心事である城の権力に関して集団的な妄想を展開させるのだと主張する(※12)。そしてこうした村の状況に、検閲等による情報統制の末、共同体内のイデオロギーが絶対視されるようになった全体主義国家の状況を重ね合わせている。そのうえで彼女は、独自の価値体系を有する閉ざされた共同体にただ一人アウトサイダーとして乗り込んでゆく『城』の主人公Ｋの変容を、次のように分析している。

> 人と接触し宥和しようというＫの試みはこの風土において通用することはなく、彼は忽ち疲弊する［…］。
> そこから城の外観については言及されなくなる。目に見える、Ｋが知覚できる現実としての城にはもはや意味がない。Ｋの知覚はもはや重要ではないからだ。
> ［…］彼は凍り付くような抑圧的な風土に馴染んでしまい、高まる疲労によって彼がこの環境を理解しそれに順応したことが強調される。(※13)

ここでモニーコヴァーは、Ｋは村人との度重なるコミュニケーション齟齬によって自身の知覚や感覚に対する自信を失ってゆくと考えている。その際彼女は、それを暗示する要素として、本文における城の外観に関する描写の消滅を挙げる。なるほど村人に近づこうというＫのアプローチは、閉鎖的な村において冷たく跳ね返され続けるし、村で共有されている独特な思考回路はたびたびＫには理解しがたいものとして描かれる。しかしながらＫは、疲労感の高まりとともに村の雪と寒さ、村全体を満たす無気力感に馴染み、「村独特の物の見方に飲み込まれてゆく」(※14)。このようにモニーコヴァーは『城』を、周囲から孤立した共同体における独自の価値観が、アウトサイダーに刷り込まれていく過程を描いたものとして解釈しているのだ。

11　Moníková, Libuše: *Das Schloß als Diskurs. Die Entstehung der Macht aus Projektionen.* In: Dies.: *Schloß, Aleph, Wunschtorte.* München 1989, S. 82f.
12　Ebd., S. 75.
13　Ebd., S. 69.
14　Ebd.

以上のような『城』の理解に基づいてモニーコヴァーは、チェコ事件後共産主義体制下のプラハから西ドイツに逃れた者として、共同体を支配する抑圧的な権力を相対化し、無気力状態から脱却する方法を提示する。

> カフカから離れて——状況を変革するための方法が、搾取された者たちの頭をよぎる。保護とそれに対する同意に基づく世界像を諦めることではじめて、彼らの支配を拒み、それぞれの独裁政権に自らの意思を表示することができるようになる。(※15)

こうした記述から分かるのは、モニーコヴァーが、カフカ文学そのものが決して全体主義体制を描きだしたものではないことを理解しつつも、思わずそこにかつて自分が生きた共産主義社会のありようを投影してしまっているということである。鉄のカーテンを超えて西ドイツに移住した彼女は、全体主義社会を支配する父権的な権力を拒絶し、より主体的な人生を選びとる必要性を主張する。このように自身の経験と当時の政治状況を強く反映したモニーコヴァーのカフカ解釈は、後に彼女が文学創作を展開する際の基盤となっている。

2.3『亡き王女のためのパヴァーヌ』

以上で示したモニーコヴァーの『城』の解釈がとりわけ顕著に反映されているのが、1983年に発表された『亡き王女のためのパヴァーヌ』(以下『パヴァーヌ』と略記)である。この小説では、チェコ事件後プラハからゲッティンゲンに移住したドイツ文学研究者フランツィーネ・パラス Francine Pallas が、カフカの『城』を書き継ぐことで移住後の鬱状態を克服してゆく姿が描かれている。作中でパラスによって執筆される『城』の続編は、『パヴァーヌ』出版と同年に『バルナバス一家の名誉を回復する四つの試み *Vier Versuche, die Familie Barnabas zu rehabilitieren*』(以下『バルナバス物語』と略記)という独立した作品として雑誌『技術時代の言語 *Sprache im technischen Zeitalter*』の特別号に発表されている。つまり『バルナバス物語』は、モニーコヴァー自身によるカフカ文学への挑戦として理解することもできるのだ。このことを念頭に置いて、ここではまず『バルナバス物語』においてモニーコヴァーがいかにカフカ的な世界像を書き換えているかを分析する。

『バルナバス物語』においてモニーコヴァーは、原作の主人公のKに代わって、城からの手紙をKに届ける使者バルナバスとその家族に焦点を当てて『城』を書き換える。バルナバスの父は、もともと靴職人および消防隊員として村で名を馳せていた。しかし次女アマーリアが城の役人の求婚を断ったことをきっかけに一家は村八分にあい、彼らの苗字も忘れられてしまう。父は城に嘆願を出そうと手を尽くすうちに病に倒れ、今では長女オルガが情報収集のため下級役人のもとへ通い、身を売っているようである。これに対して『バルナバス物語』では、村で最も虐げられているオルガが、原作では不可能に見

15　Ebd., S. 83.

える一家の共同体への復帰を導く。この際モニーコヴァーは、無気力状態に陥った村の人々に対して、オルガを行動力のある人物として描き出している。例えば城からの手紙が3年の紛失期間を経て一家のもとに届くシーンでは、家族全員が封筒に付された城の紋章を前に慄き身動きが取れずにいる中、オルガだけが物怖じせずに手紙を開き、宛名を読み上げる。

> オルガはテーブルの縁まで滑ってきた手紙を手に取り、十字に掛かった紐を解いて封を開ける。「…へ」*、彼女は一家の名前を朗々と読み上げて辺りを見渡し、一人一人を見つめる。――父は震え、バルナバスは再び子供に戻り、アマーリアは一番遠巻きに突っ立ったまま、窓に映った自分の姿を身じろぎせずに見つめ、母は病でもはやベッドから起き上がることができないながらも、驚きに目を見開き、耳をそばだてている。――いらっしゃい、と言う彼女の声は、かつて訪問客を迎え入れた時のようにはっきりとしており、少しずつ威厳に満ちてくる。(※16)

一家に届いたのは、父が城の消防局の第三指揮者に任命されたことを告げる手紙である。そのため、オルガが読み上げたのは父のフルネームであると推測される。しかしながらそれが本文で明示されることはなく、代わりに「ここには、30年経ってやっと許せるようになったあなたの父――アルコール依存症患者、盲目的な党員――の名を入れよ」という脚注 (*) が添えられている。アルコールに溺れて家族に横暴な振る舞いを取りつつ、国家権力に盲目的に追従する父親像は、ナチズムやスターリニズム等の全体主義体制下における権威主義的人間を連想させると共に、バルナバス一家の家父長主義的性格を示しだしてもいる。というのもバルナバスの父は、城の権力に縋りつづける一方で妻子の話には耳を貸さず、一家を破産に追いやるという横暴な人物でもあるからだ。それに対して『バルナバス物語』のオルガは、毅然とした態度で父や他の家族を見渡し、忘れ去られていた一家の名前を彼らに思い起こさせる。このことは、彼女がもはや一家の家父長主義的雰囲気からも、城の権力を頂点とする共同体の価値体系からも抜け出していることを暗示している。

実際オルガは、続くエピソードにおいて共同体に迎え入れられた家族を残して村から脱出する。

> 国道に通じる橋の上で彼女は振り返る。村の家々ははっきりと区切られてそこにあるけれど、城はどこにもない。馬小屋に下男を、兄弟と家族をあとに残して。彼女は自分の行く道に向きなおる。花咲き乱れ塵が舞う通りの林檎並木の風景のほうへ。She's leaving home bye bye. (※17)

このシーンは明らかに、村に到着したＫを描いた『城』の冒頭を念頭に置いたものである。城の権力を絶対視する村の価値観に飲み込まれてゆくＫに対して、村から抜け出してゆくオルガの目に城の姿が映ることはない。彼女は村に背を向け、Ｋが村に到着した際に通った国道に通じる橋を逆行し、雪に閉ざされた閉塞的な村から林檎の花が咲く春の世界へと旅立ってゆく。『バルナバス物語』においてモニー

16　Moníková: *Vier Versuche, die Familie Barnabas zu rehabilitieren.* In: *Schloß, Aleph, Wunschtorte.* S. 91.
17　Ebd., S. 92.

コヴァーは、村で最も虐げられているオルガの立場から『城』を描きなおすことで、城の権力を相対化し、共同体内のヒエラルヒーを登ることに必死になっている人々には見えない世界を示しだしているのである。

『バルナバス物語』で示された以上のようなモニーコヴァーの主張は、この作品が『パヴァーヌ』の中に埋め込まれることによってより厚みを増す。というのも『パヴァーヌ』の主人公パラスがこの作品を書き始める動機はまさに、女性や病人、貧困者等、弱い立場にいる人物を作中で抑圧し続けるカフカに対する批判に根差しているからだ。西ドイツ移住後のパラスは、外国人として、あるいは、女性として、周囲のドイツ人や男性に対し強いコンプレックスを抱いている。また彼女は、プラハで医者として働く美人の姉に対して、キャリアの面でも容姿の面でも劣等感を抱き続けてもいる。このように既に何重もの劣等感に苛まれているにもかかわらず、パラスは『バルナバス物語』の執筆にあたってあえて車椅子生活を始めることで、自分を社会的により周縁的な立場に追いやる。『城』で最も弱い立場にあるオルガに一家の名誉回復を達成させたモニーコヴァーは、パラスを徹底的に弱い立場に置くことで、彼女にカフカ文学の世界像の脱構築を達成させるのだ。このように『パヴァーヌ』において顕著に示された弱さや辺境性が孕む可能性というテーマは、モニーコヴァーの後の作品にも引き継がれてゆく。

2.4『ファサード』

弱さや辺境性という観点からカフカ文学の世界像を脱構築しようという試みは、『パヴァーヌ』出版の4年後に発表された『ファサード』にも見受けられる。この作品は、1977年のチェコスロヴァキアの地方都市リトミシル Litomyšl で、城の壁面修復に携わるプラハ出身の4人の芸術家とその仲間たちをコミカルに描いた長編小説である。物語後半において主人公たちは、仲間の一人が京都の映画会社から仕事の依頼を受けたことをきっかけに、日本に向けて旅立つ。しかしながら、彼らは道中ソ連の共産党幹部から妨害をうけ続け、散々シベリアを放浪した挙句、目的地に辿り着くことなくリトミシルに帰ってくる。

完了したとたん劣化が始まるシシュフォスの苦行にも似た壁面修復や、いつまでたっても目的地に辿り着けない主人公たちの旅を描いたこの作品は、明らかにカフカの『城』を下敷きにしている。モニーコヴァーはこの作品においても、『バルナバス物語』と同様カフカ文学の世界像の脱構築を試みているのだ。とりわけその試みが顕著に表れているのが、作中で最もページ数が割かれている第13章である。

シベリア放浪の最初のエピソードであるこの章で主人公たちは、飛行機のトランジット中に近隣地域に観光に出かけた末、ソ連有数の学者が集うアカデムゴロドク Akademgorodok に迷い込む。彼らは同地の学者たちからチェコスロヴァキア使節団と勘違いされ厚い歓待を受ける一方で、村の書記長から密かに反革命分子の疑いをかけられ、6週間にわたって村に拘束される。その間主人公たちは村から出発する許可を得るために、自分たちが単なる芸術家にすぎず、ソ連に対して強い親近感をいだいていることを証明する作戦に出る。まず彼らは、村の学者たちによるスメタナとヤナーチェクの楽曲の演奏を受けて、ロシアの文豪ゴーゴリの『検察官』を上演し、ロシア文学への理解を示す。しかし公演が好評を博したにもかかわらず、書記長は彼らの出発を許可しない。続いて主人公たちのうち最も優れた画家が

村の研究機関のファサードに平和の鳩の紋章を施し、ソ連とチェコスロヴァキアの友好を示すが、これも学者たちからの評価は受けるものの、村からの脱出の助けにはならない。裏切られ続ける主人公たちの思惑は、彼らとソ連の学者たちの間にある認識や思考回路の齟齬を浮かび上がらせ、主人公たちを無気力状態に陥らせる。

> そうこうするうちに気温はマイナス30度にまで下がった。宿の入り口に雪が積もって以来、彼らの間には疲労感と無気力感がいや増した［…］もう彼らは逃げられるかどうか尋ねなかった。何が悪かったのか彼らにはわからなかったが、そんなことはどうでもいいのだろう。あらゆることに何らかの意味があったのかもしれない。(※18)

以上の描写は、明らかに『城』に関するモニーコヴァーの分析に基づいている。ここでアウトサイダーである主人公たちは、ソ連の学者たちからの評価を気にするあまり、自分たちの本来の判断能力を失っている。彼らは雪で閉ざされたアカデムゴロドクの閉塞的な雰囲気に飲み込まれ、疲労感と無気力感に陥った結果、村を脱出する希望を失ってしまうのだ。

ところが村の書記長から申し渡された村のアイスホッケーチームと試合が、思いがけず彼らを村からの脱出に導く。芸術家として日ごろからスポーツと縁遠い主人公たちは、当然のことながら学者たちを相手に大敗を喫する。しかし、これが図らずしも書記長のソ連国民としての自尊心を満たし、彼らは晴れて村を離れる許可を得る。このエピソードの下敷きになっているのは1969年3月にヘルシンキで行われたアイスホッケーの世界選手権である(※19)。ワルシャワ条約機構軍による占領を経験したばかりのチェコスロヴァキアは、この世界選手権で強敵ソ連を倒す。しかし歓喜のあまり暴徒化した一部のチェコ人がプラハのアエロフロートを襲撃したために、「プラハの春」の指導者ドゥプチェクの退陣が早まったと言われている。これに対して『ファサード』の主人公たちは、試合の敗北を通して村からの解放を得る。ここでもモニーコヴァーは、強さに固執する中では見出だされえない可能性が、弱さや辺境性を通して発見されうることを示しているのだ。

2.5 プラハ・ドイツ語

弱さや辺境性という観点からカフカ文学の世界像を脱構築しようという試みは、明らかに、共産主義社会から逃れたモニーコヴァー自身の経験や、外国人、女性としてのマイノリティ性に基づいている。その一方で、彼女がこうした弱さや辺境性が秘める可能性を見出したのがまさにカフカ文学においてであるということも、見逃してはならないポイントである。このことはとりわけ1989年のカフカ賞受賞に際してのエッセイに顕著に表れている。

18　Moníková: *Die Fassade.* München 1987, S. 316.

19　Haines, Brigid: *Er ist das Maß. Franz Kafka in Libuše Moníková.* In: *German Life and Letters*, (60) 11.1. 2007, S. 127.

わたしが書くことができるのはカフカのおかげです。彼がわたしに自分のものでなく、決して自信を持てない言語で書く勇気を与えてくれました。

[…]

ドイツ語で読むと他のプラハのドイツ語文学の作家や彼の同時代人全員との巨大な違いに気付きます。

無駄がなく、節約的で、硬質で、正確。

彼は「貧しさ」を司っているのです。(※20)

カフカのドイツ語の貧しさに関するモニーコヴァーの指摘は、明らかにプラハ・ドイツ語にまつわる言説に基づいている。プラハ出身の思想家マウトナーは、チェコ民族の居住地ボヘミアのただなかで言語島を形成していたプラハのドイツ系住民のドイツ語を「紙のドイツ語」と呼んだ(※21)。近年進んだカフカのドイツ語の言語学的な分析により、プラハ特有のドイツ語の発音やイントネーションは方言学的に確認されないことが明らかになっている(※22)。しかしながらプラハ・ドイツ語のイメージ自体は長らく影響力を持ち続けた。外国語であるドイツ語で文学創作を行うにあたってモニーコヴァーは、プラハ・ドイツ語というコンテクストの中でカフカの文体を捉えなおすことで、言語的な貧しさは障害にはならないどころか、むしろ武器になることに気づくのである。

言語的な貧しさという弱点を肯定的に読み替える発想は、同じく外国語であるドイツ語で文学創作を始めるパラスを描いた『パヴァーヌ』でも重要な役割を果たしている。というのもパラスは、夢の中で遭遇したカフカがドイツ語で話すのを耳にしたのをきっかけに、『城』の書き換えを心に決めるからだ。

「まだ行かないで！ バルナバスたちをどうするつもり？」

その時わたしは、彼が子供っぽく滑稽に聞こえる訛りや間違いのあるチェコ語で答えるかもしれないと不安だった。

「ならばあなたが書かねばなりません」彼はそう言って笑った。彼はわたしと同じドイツ語の訛りをしていた。(※23)

パラスは西ドイツ移住以来、自分のチェコ語なまりのドイツ語に強いコンプレックスを抱いていた。しかし、自分のドイツ語とカフカのドイツ語の間に共通点を見出した彼女は、自分のドイツ語がむしろ新たな言語表現の可能性を孕んでいることに気づく。

ここで興味深いのが、パラスが、カフカがチェコ語を話す可能性を指摘している点だ。ここには、戦前のプラハの多民族・多言語環境と同時代の文学に対するモニーコヴァーの深い理解が反映されている。

---

20 Moníková: *Klosterneuburg, 6. 6. 1989. Rede zur Verleihung des Kafka-Preises.* In: *Schloß, Aleph, Wunschtorte.* S. 142.

21 Mauthner, Fritz: *Erinnerungen. Prager Jugendjahre.* Frankfurt a.M. 1969, S. 49.

22 Vgl. Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen: „ …in einem Stockwerk des innern babylonischen Turmes…“* Tübingen 2003, S. 83-88.

23 Moníková: *Pavane für eine verstorbene Infantin.* München 1988, S. 95.

カフカ文学をはじめとする〈プラハのドイツ語文学〉は、同時代のチェコ語文化との交流抜きで考えられない。例えば『カフカとプラハ』で知られるパウル・アイスナー Paul Eisner（チェコ語名はパヴェル・アイスネル Pavel Eisner）は、「この土地（プラハ）は共生が運命づけられている(※24)」と主張し、当時のプラハにおけるチェコ・ドイツ・ユダヤの三民族の共存状況という観点から〈プラハのドイツ語文学〉を考察している。また今日チェコ文学の代表的作家と見做されているニェムツォヴァーやカレル・ヒネク・マーハ Karel Hynek Mácha が当初ドイツ語で文学作品を発表していたように、チェコ文学にとってもドイツ語文化は非常に重要な意味を持っていた。このようにボヘミアの文学は本来、民族的、言語的差異を超えた交流に根差しているのである。しかしながらこうした多民族・多言語環境は戦後のプラハでは失われ、忘れ去られてしまった。こうした中、モニーコヴァーはより多様性に満ちた西ドイツに移住するとともに、母語であるチェコ語ではなく、自分にとってより不自由なドイツ語による執筆を選択することで、プラハのドイツ語作家が置かれていた言語的状況に自ら身を置く。この点で彼女は、活躍した場所や時代こそ異なるものの、プラハのドイツ語作家の精神を抱きながら文学創作を展開したのだといえる。このように、第二次世界大戦を機に途絶えたかに見えた〈プラハのドイツ語文学〉は、実際は戦後生まれのチェコの作家にしっかりと引き継がれていたのである。

結び

以上で考察してきた通り、ライネロヴァーとモニーコヴァーは共に戦後ドイツ語で文学創作を展開したチェコの作家でありながら、〈プラハのドイツ語文学〉との結びつきにおいても、創作スタイルにおいても、大きく異なっている。両者に共通するのは、〈プラハのドイツ語文学〉を第二次世界大戦前のプラハにおける多民族・多言語環境の象徴と見做し、その文学的な重要性を強調している点である。

プラハのドイツ語作家と同時代を生きたライネロヴァーの文学創作は、かつてのプラハの多文化的雰囲気を、それを経験したことのない戦後生まれのチェコの人々に語り継いでゆこうという使命感に支えられたものであった。その一方で戦後生まれのモニーコヴァーは、移住先の西ドイツで外国語であるドイツ語による執筆を行うことで、多民族・多言語環境の最中で文学創作を行う自分自身をプラハのドイツ語作家になぞらえた。このように両作家は、各々の方法で〈プラハのドイツ語文学〉の伝統を自身の作品の中に継承している。こうした作家の活動には、従来第二次世界大戦を機に消滅すると考えられていた〈プラハのドイツ語文学〉の枠組みを時間的に拡大する可能性が秘められている。〈プラハのドイツ語文学〉の伝統は、戦後のプラハにおける物理的な多民族・多言語環境の喪失によって途絶えることなく、後のチェコの作家に確かに引き継がれていったのである。

24　Eisner, Pavel: *Milenky*. Praha 1992, S. 8.

参考文献

Reinerová, Lenka: *Das Traumcafé einer Pragerin.* Berlin 2008.

Reinerová, Lenka: *Zu Hause in Prag manchmal auch anderswo.* Praha 2003.

Moníková, Libuše: *Pavane für eine verstorbene Infantin.* München 1988.

Moníková, Libuše: *Schloß, Aleph, Wunschtorte.* Essays. München 1990.

Das Schloß als Diskurs. Die Entstehung der Macht aus Projektionen. S. 69-83.

Vier Versuche, die Familie Barnabas zu rehabilisieren. S. 84-92.

Klosterneuburg, 6.6.1989. Rede zur Verleihung des Kafka-Preis. S. 139-143.

Moníková, Libuše: *Die Fassade.* München 1987.

——

Eisner, Pavel: *Milenky*. Praha 1992.

Goldstücker, Eduard: *Die Prager deutsche Literatur als historisches Phänomen.* In: *Weltfreunde. Konferenz über die Prager deutsche Literatur.* Prag 1967.

Goldstücker, Eduard: *Franz Kafka aus Prager Sicht.* Prag 1963.

Haines, Brigid: *Er ist das Maß. Franz Kafka in Libuše Moníková.* In: *German Life and Letters,* (60) 11.1. 2007.

Lidovky.cz: *Sahám jen do své zásoby zážitků.*
http://www.lidovky.cz/saham-jen-do-sve-zasoby-zazitku-d3j-/kultura.aspx?c=A061130_092310_ln_kultura_znk（最終閲覧日2017年5月9日）

Liehm, Antonin: *Generace.* Köln 1988.

Mansbrügge, Antje: *Autorkategorie und Gedächtnis Lektüren zu Libuše Moníková.* Würzbuurg: Königshausen&Neumann 2002.

Mauthner, Fritz: *Erinnerungen. Prager Jugendjahre.* Frankfurt a.M. 1969.

Mein Buch ist teuer/ Moje knihy jsou drahé. Prag 2008.

Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen: „…in einem Stockwerk des innern babylonischen Turmes…“.* Tübingen 2003.

Pfeiferová, Dana: *Libuše Moníková. Eine Grenzgängerin.* Wien 2010.

Radio Praha: *Lenka Reinerová -a writer who keeps the rich tradition of Prague German literature alive.*
http://www.radio.cz/en/section/books/lenka-reinerova-a-writer-who-keeps-the-rich-tradition-of-prague-german-literature-alive（最終閲覧日2017年5月9日）

Windt, Karin: *Beschädigung, Entschuldigung – Überlieberung, Auslieferung. Körper, Räume und Geschichte im Werk von Libuše Moníková.* Bielefeld 2007.

Salmhofer, Gudrun: *Was einst gewesen ist, bleiben in uns. Erinnerung und Identität im erzählerischen Werk Lenka Reinerova.* Wien 2009.

Schlicht, Corinna: *Lenka Reinerová. Das erzählerische Werk.* Oberhausen 2003.

Wagnerová, Alena: *Milena Jesenská: Biographie.* Mannheim 1994.

Weinberg, Manfred: *Migrationsliteratur – eine Bestandsaufnahme. Am Beispiel von Libuše Moníkovás Pavane fúr eine verstorbene Infantin.* In: *Zeitschrift für interkulturelle Germanistik* 2 (2012), Heft 2, 2011, S. 93-111.

Weinberg, Manfred: *Der Blick zurück nach Böhmen. Libuše Moníkovás Entwurf eines anderen Europas aus dem Geist der Migration.* In: Bundesinstitut für Kultur und Geschichte der Deutschen im östlichen Europa (Hg.): *Jahrbuch des Bundesinstituts für Kultur und Geschichte der Deutschen im östlichen Europa*, Band 24 (2016), S. 215-230.

ミラン・クンデラ『小説の技法』（西永良成訳）、岩波書店、2016年。

あとがきにかえて

三谷 研爾

最初に記したとおり、本書は2016年10月に関西大学で開催された日本独文学会のシンポジウム「〈プラハのドイツ語文学〉再考」にもとづき、各口頭報告に加筆訂正をくわえて、論文集としてまとめたものである。さいわい当日は50名あまりの参加者を得て、さまざまな質問やコメントを受けることができた。ここでは、あとがきにかえて、その場での議論から見えてきたポイントをいくつか紹介し、今後の研究につなげていきたい。

プラハのような複数文化的な環境にある場所――そこはしばしば政治的・文化的な紛争地である――から生まれる文学を論じるさい、ひとはなによりまず言語を手がかりに作家たちのアイデンティティを理解し、その文学を記述しようとする。言語は各人の文化的帰属のもっとも確実なメルクマールとみなされるからである。そもそも文学史という構想じたい、言語に着目してひとつの文化にくっきりした輪郭を与え、その来し方行く末を語るものだ。だが、こうした発想は、プラハ的複数文化性をまえにしたとき、はたして有効なのか。作家たち自身をも深くとらえていた言語的アイデンティティを相対化して考えることは、いかにして可能か。アイデンティティの不安定化や流動化とは、言語活動の現場では、どのような具体的状態を指すのか。これが、フロアとのコメントおよび関連質問の往復を重ねるうち、しだいに焦点を結ぶにいたった今回のシンポジウムのなにより肝要な問いだろう。

ショーヴィニストとすら呼べる同化ユダヤ人マウトナーは、「母語」としてのドイツ語にたいし熱烈な愛着を示す反面、自身の言語的アイデンティティに確信をもつことできない。そうしたアンビヴァレンツは、二言語話者カフカの作品では、まったく言及されないその不在性において逆照射される。そのカフカは、一方では『自衛』紙を講読するだけでなく、『律法の門前（掟のまえ）』などを寄稿して、ユダヤ・ナショナリズム（＝シオニズム）に深く関わっていった。のみならず、ヘブライ語をも介して、チェコ語作家たちと交流している。第二次世界大戦後、プラハ・ドイツ語は豊かさに欠けるとしたマウトナーの断案のもとにカフカと対決したモニーコヴァーは、自身のドイツ語の「貧困」を武器として研究者からドイツ語作家へと転身を遂げる。――一見したところ、あたかもカフカひとりを媒介項にしていくつもの事象が関連しているように思われるが、そうではない。作家たちがこのように、異なる言語環境を同時に生きることを可能にするひとつの世界が、たしかにプラハに存在していたのだ。つまりは、複数の文化が多層的に重なり合っているポリフォニックな世界である。そこで生起した事態をよりよくとらえるには、言語的アイデンティティを強度を下げて理解し、複数の言語の併存によってもたらされる文化生成の場を検証していく必要がある。それは、昔ながらのドイツやチェコの国民文学史でも

なければ、詳細をきわめるボヘミア・モラヴィア郷土文学史とも異なるかたちで、複合文化域としてのこの地域に成立した文学世界を渉猟することにほかならない。作家レベルで考えるなら、彼／彼女がプラハあるいはボヘミアという同じひとつの場所に立ちつつ、いくつもの異なる言語と文化の層を同時に生き、また生きざるをえなかったという経験の深みが、さらに丁寧に吟味されなければなるまい。

そのような問題意識は、たとえばチェコ系ドイツ語作家ライネロヴァーによって、21世紀に入ってから設立されたプラハ文学館の活動とも地続きだといえる。この組織は、ボヘミア・モラヴィア出身のドイツ語作家についての研究情報を発信する一方、さまざまな言語的・文化的背景をもつ作家のイベントやアーティスト・イン・レジデンスといった活動をくりひろげることで、プラハでの文学創作をトータルに支援する、つまり現代における新しい文化形成をうながそうとしている。いいかえれば、20世紀初頭のプラハが持っていた複数文化のポテンシャルを引き継いでいこうというのである。〈プラハのドイツ語文学〉を20世紀ヨーロッパ文学史の誇るべき遺跡として保存しておくのでなく、それとの不断の対話あるいは対決をとおして、現代社会とたえずアクチュアルに関わり続けることにこそ、この研究テーマに取り組む意味があるといってよい。

とはいえ、それぞれの切り口は、まずは地道に考察を深めていくべきものである。プラハあるいはボヘミアの歴史的文化的背景をふまえたうえで、個別テクストをその文脈に即して周到に読み込んでいく作業は、今後いちだんと重みを増すであろう。『自衛』のような個別のメディアに注目し、その読者像を明らかにして影響の度合いを考量する作業は、作家たちを取り巻く社会文化的環境を、マクロな社会史的記述とは異なったかたちで明らかにすることにつながるだろう。またユダヤ系知識人をとらえていた政治的・文化的潮流については、プラハだけでなくハプスブルク帝国、ひいては中欧全域のユダヤ社会の動向のなかで評価する作業が欠かせまい。そしてなにより、ドイツ（語）文学とチェコ（語）文学をともに視野に収め、両者の黙殺・衝突・並行などの諸関係をヴィヴィッドに語ることが求められよう。フロアからの具体的事象にかかわる質疑によって、これらの問題が、さらにしっかりした事例研究の積み重ねをへて検証・説明されねばならないこともまた浮き彫りとなった。

おおむね以上が、今回のシンポジウムをとおして私たちにあらためて示された課題であり、その所在を確認できたことの意味はとても大きい。この成果にもとづいて、ゲルマニスティク／スラヴィスティクの枠組を越える研究をさらに展開したいと考えている。その点、今回のシンポジウムメンバーとして日本独文学会外から阿部賢一さんをお迎えできたのは、たいへんありがたいことだった。フロアから多くのレスポンスを頂戴できたのも、阿部さんの参加によって本シンポジウムが厚みを増したからにほかならない。ご厚情にあらためて心から御礼を申し上げたい。

なお、本書の公刊は、日本学術振興会の科学研究費補助金による研究課題「〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究」（基盤（C）、研究代表者：三谷研爾、JP15K02414）の成果発表の一環であることを申し添えておく。

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr.123
Alle Rechte vorbehalten
©2017 Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo

日本独文学会研究叢書 123号
2017年9月30日発行

〈プラハのドイツ語文学〉再考

編集　三谷研爾

発行　日本独文学会
〒170-0005
東京都豊島区南大塚3-34-6-603
電話 03-5950-1147
メールフォーム http://www.jgg.jp/mailform/buero/

Ⓒ2017 日本独文学会

SrJGG

ISBN 978-4-908452-13-0